
Six Feet Under

蝶野夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Six Feet Under

【Zコード】

Z66240

【作者名】

蝶野夜

【あらすじ】

アンデッド・ハンターを教育する聖ソール学園からの命令で街に出た訓練生のエレインを墓地で待ち受けっていたのはアンデッドでもネクロマンサーでもなく……現代、ダークファンタジーっぽいです、多分。

今でも不意に思い出す。

サイテーな初恋を。

そんなに昔のことでもないのに、とても遠く感じる。

もう戻ることはない日々、何もかも、バラバラになってしまった。

初めてのキスの味は甘くなかった。

暴力的で、獣臭い、血の味のキス。

温もりは生々しく、妙に力強かつた。

そのまま全てを捧げてしまいたくなるほどに。

唇が離れて、乱暴に自分の唇を拭いながら、あたしは顔を上げることができなかつた。

ただ待つていたのに、そいつは何も言わなかつた。

あたしが舌を噛んだから喋れなくなつたわけでもないだろうに。

「……何でよ？」

やつと、絞り出した声は情けないくらい震えていた。

悲しいのか、悔しいのか、何も分からぬ。

「さあな」

そいつは何事もなかつたかのようにはぐらかした。「理由なんていらねえだろ」って、いつものセリフが聞こえてきそうだった。

あたしたちの関係は不健全だけど健全で、こんな間違いが起こるはずもなかつた。

お互に学校中に疎まれて、そいつだけはあたしを蔑まなくて、だから、一緒にいるようになつた。

そいつは、あたしを女として見ていなかつたから、楽だつた。

それなのに

「わけわかんないわよ……！」

裏切られたような気分で、そいつを睨む。

愛情も友情もない、そんな関係だった。信じていたわけでもない。裏切りさえ意味のないものなのかもしれない。

「だろうな」

そいつは笑つた。今まで見たことのない笑みを浮かべて、あたしを見ていた。

今までそいつを男として見たことはなかつた。性的な魅力なんて感じなかつた。

なのに、今は情欲を宿した目にぞつとする。

「あんたってホント、サイテー」

吐き捨てても、不快感は消えてくれない。

そう言えば、最近妙に余所余所しなかつたとは思つてた。あたしの勘がどれくらい鋭いかをよく知つてゐるくせに、はぐらかそつとした。

この前、「誰か好きな子でも出来たの?」つて聞いたけど、「そんなんじゃねえ」つて言つて、それ以上何も言わせよつとしなかつた。

「俺が憎いか?」

「馬鹿にしないで!」

憎い?

そんなのわからない。何もかもがわからない。

「てめえは俺が知る限り、サイコーに氣高い女だ」「何を言つてるのかわからない。

何を考えてるのか全然わからない。

その表情の意味がわからない。

「だから……だから、陥落させるの？」

あたしを地の底まで落としたい人間はいくらでもいる。

この男もあの女と寝たわけ？

どんな嫌がらせを受けても泣きたいって思わなかつたのに、今はそんな気分。

涙はもう涸れ果てて、泣き方さえ忘れたと思つてたのに。

延ばされた手が頬を掠める。

「じゃあな、エレイン 愛してたぜ」

払いのける前に手は離れた。

背を向けて、そいつはそのままいなくなつた。

学園を辞めた。否、裏切つた。

あたしの敵になつた。

そして、あたしの初恋は知らない間に始まつていて、気付いた時に終わつた。

Out of the mouth comes evil.

窓の外、一枚ガラスを隔てた向こう側で景色が流れ。何もかもが過ぎ去っていく。

車に乗るのは久しぶりだった。

最後に街に出たこと自体、随分と昔のことのような気がする。あの場所はあたしにとつて牢獄だから無理もない。けれど、浮かれられるような状況じゃない。

これだつて任務なのだから塀の中のお勤めと変わらない。

街で色々ショッピングできたら楽しいかもしないのに、あたしはこれから全く美しくない奴らを相手にしなきやいけないような面倒臭いお仕事。

腐臭を漂わせ、冷たく暗い地中から這い出してきた奴ら アンデッド。

あたしはそれらを滅するためだけに生かされている。

あるいは、それらを使役するネクロマンサーを。

今回に限つて最優先する対象は少し違つけれど。

あたしの所属は聖ソール学園、そこでアンデッド・ハンターとしての教育を受け、卒業後もこき使われ続ける運命つてわけ。

その呪縛から逃れられることはない。

「ねえねえ、エレイン。さつきのつてどうじつ意味？」

隣から聞こえる声がうるさい。

まるで子供みたいに馴れ馴れしくて、煩わしい。無視。

「エレインつてば！」

エレイン、それがあたしの名前。学園では^{マサニヤ}気違いエレインつて呼

ばれることもじばじば。

「……何？」

そつちを見るのは面倒臭くて、窓の向こうを見たまま返事をした。
「面倒臭い女は嫌、ってオフィスでボスに言つてたじやん」
そう言えば、言つたつけ。残念ながら、全く聞き入れてもらえない
かつたわけだけど。

「あんたみたいのがパートナーなんてお断り、つて言つたの」「
こんなうるさいだけの女がパートナーなんて馬鹿馬鹿しそざわる。
えへつ、私だつてねえ、ハンターなんだよ？」

彼女は不満があるみたいだつたけど、文句を言いたいのはあたし
の方。

「一体でも倒せたら認めてあげる」

この時点では彼女を認めるとはできない。ただの運転手だつて言
うならまだ納得できただけ。

多分、実際に仕事をしても認められないと思つ。

「あのせ、色々聞きたいことあるんだ」「
黙つてくれる？」

相手が年上だらうと関係ない。

学園と関係のあるハンター集団“グレイヴ・キーパー”の一員だ
ろうと何だらうと、どうだつてい。

どうせ、学園もその分野に関しては自分のところが一番だと思つ
ていて、これも協力してもらつているのではなく、協力させてやつ
ているのだということになるのだから。

彼女はボスからあたしのお守りを仰せつかつてゐるけれど、あた
しは学園から彼女を案内係と聞いてゐる。
緊張をほぐすなどと思つてゐるなら大きな間違い。お節介。

「…………はあ」

沈黙は全然続かなかつた。黙つて、つて言つただけなのに、まる
で息を止めてたみたい。

「あ、あのセ、Hレイン。私、沈黙つてダメなんだよね……話して
くれないなら、このまま一人で喋るけど」

多少は申し訳ないと思つてゐるのか。

「喋らないと、もつとうるさい、ってこと?」

「そ、そういうことになっちゃうかな……？」えへつ
諦めるしかなさそうだ。不運なことに目的地までは遠い。遙々出
てきたのに、それをまた戻るくらい遠い。

一度、“グレイヴ・キーパー”のオフィスに連れて行かれたのは
嫌がらせに違ひない。

「学園のセンセーが生徒連れてくることは今まであつたけど、
エレインはあのちょ一息苦しそうな制服着てないんだね」

学園は実地訓練の度に“グレイヴ・キーパー”を利用する。

学園の生徒（と言つてもハンターになる生徒だけ）は本当に息苦
しそうな制服の着用が義務づけられている。

夜闇の中でも目立つ真っ白な制服は学園の紋章である太陽が刻ま
れたボタンやら、十字架やらで豪華に装飾されている。
特別な纖維で作られていて、よく体にフィットして動きやすいつ
て言つけど、あたしの今の格好は黒ずくめ。ジャケットにタンクト
ップにジーンズ、全部安物。理由は簡単。

「あたしは許されてないから」

義務のはずなのに、あたしは例外。あのイカレた制服を着なくて
済むのは嬉しいけど、例外でいるのはとっても面倒臭い。

「あそこって、ちょ一厳しそう

「そうでもないと思つけど」

「そう?」

確かに制服のせいでストイックな印象があるけど、厳しく当たら
れているのはあたしだけのような気がする。

規律がどうのこうの言つてる割には乱れてる。普通のハイスク
ールと変わらないと思つ。（あたしは普通のハイスクールに行つた

ことないけど

「夜中にパーティーしたりしてるわよ」

「マジ？ どんな？ まさかゾンビ狩りパーティーとか言わないよね？」

ゾンビ狩りパーティー、なんて素敵な響き。それだったら、あたしも毎回参加したつていい。

でも、実際はそんなに素敵なパーティーじゃない。

「乱交パーティー」

「うえつ……それって本当？ あんな制服着てるのに？」

「あんな制服だから」

「わあ」

学園のシンボルの太陽は莊厳、英雄、青春、理性、真理などの象徴だけど、締め付ければ締め付けるほど爆発するみたいな感じ。あるいは、そんなことしたつて何も変わらないみたいだ。

学園の生徒は決して聖人じゃないつてこと。アンデッド・ハンターはただの人。この女みたいに。

「じゃあ、エレインも？」

「まさか、あたしはどこにも仲間に入れてもらえないから」
あたしには、馬鹿なお祭りに参加するような時間はない。
あたしが行つた瞬間、みんな黙つて服を着ると思う。

つまり、あたしは例外で嫌われ者。

「うつわ、ちょークール！ 高嶺の花つて感じ！」

そう思うのなら、このまま口を閉じておいてほしい。死体みたいに黙ってくれればサイコーなんだけど。

「授業つて何やるの？ たまに実地訓練に来る以外で」

普段生徒に聞ける機会がないからか、質問が途切れてくれそういうも

ない。

これは訓練じゃないっていうのに。

「基本的にいつでも出られるように訓練受けてる

「いつでも、つて夜中でも？」

「夜間授業だから」

「じゃあ、今から昼夜逆転生活つてわけ？」

ハンターの活動時間は夜。昼間つからアンデッドは墓から這い出してこない。太陽に焼かれて死んでしまう。

まあ、あたしが今ここにいるのは、実地訓練なんかじゃないけど。

「昼間の授業受けるのはネクロマンサー」

「え？ だつて、あいつら、ハンターの敵でしょ？」

そうネクロマンサーはハンターの敵、永遠の眠りに就きし者を呼び起こす存在。アンデッド・ハンターを育てる聖ソール学園には、ネクロマンサーの関係者もいる。

「保護とは言つてゐけど、そんなの体裁。実際は軟禁生活で、いかに、蘇生術が恐ろしいものかを徹底的に教えるの。夜は完全外出禁止

「うつわあ……じゃあ、いつでも脅されてる感じ？」

ネクロマンサーを捕まえて親族の子供さえその道に進まないよう徹底的に教育している。

そんなこと、完璧にできないから、ハンターの教育が進んでるわけ。はつきり言って、学園に捕まるようなネクロマンサーはとっくに廃業してるわけで、闇に生きる者は実に巧妙に隠れている。人質にもならない。ただの見せしめ。

「ハンターの奴らの敵対意識は凄いけど」

死靈術を使えなくとも、ハンター連中にとつてネクロマンサーが家系にいた者は血が汚れてるつてことらしい。

「確かに、みんな、性格きつそつだったよ。この前、来た子たちもあたしは実地訓練に出たことはないけど、そのメンバーくらいは知つてゐる。ハンター訓練生の中でも特に優秀な生徒が外に出られる。総じて傲慢で、自分を強いとか特別だと高貴だと勘違いしてゐる奴らが。

アタシは実地訓練に出してもらつたこともないけど。

「あ、でも、男の子の一人は優しそうで、ちょーイケメンだった。やつぱり、学園でも有名な子でしょ？ 完璧、って感じだもん」

“ミスター・パーフェクト”ってみんな言つてる

「そのまんま……」

エドワード・アームストロング、学園のハンター訓練生の中ではトップクラス。

あたしの好みじゃないけど、イケメンといつて差し支えはないと思う。

尤も、彼を“ミスター・パーフェクト”と初めに呼んだのはあたしだけど。それも皮肉で。

「でも、女の子の方は、本人が思つてるほど美人でも何でもないなあ、つて感じだつた」

「それもみんな言つてる。でも、本人はマドンナ気取り」

アンナ・メイソン、彼女もやっぱりトップクラスに入るけど、調子に乗つてるところが多くあるとあたしは思つてる。

「何か、アメフトの花形とチアつて感じだよね」

「生憎、アンデッド・ハンター訓練生トップと自称トップだけどね」
実際、アンデッド・ハンターとしての教育を受けてる以外は本当に普通のハイスクールにありがちな現象が起こる。（多分、だけど）

「でもさ、ヒレインの方がモテるでしょ？」

「あたしはみんなから嫌われてるけど、物凄く」

「マジ？」

「ゴキブリくらい」

そう言つたら、ぴたりと彼女の口が閉じた。

でも、これは事実。あたしよりゴキブリが出た方がましかもしれない。

ゴキブリは叩き潰せるけど、マッドは潰れない。

だから、あたしがモテるなんてことはない。ありえない。誰もあ

たしに声をかけようとはしない。浴びせらるるのは汚い言葉だけ。

「やの、『マドンナ』がさ、その『ミスター・パーク』に何かとアプローチしてゐるんだけばさ、全然相手にされてないのが笑えた」
黙らせるに成功したと思ったのに、再起動してしまった。
「いつものこと。誰も『嘘吐きマドンナ』のお相手なんかしたくな
いから。ベッドの上じゅなきゃね」

別にあたしも話したくて、うずうずしてこたつてことはない。
口を開いていた方がましなこともある。

「『ミスター・パーク』……面倒臭いからMPね。MPに『
そんなに『ハーフ・ブラッド』の方がいいの！？』って言ってたけ
ど、それって何？」

「ハンターとネクロマンサーのハーフ」

それでもアンデッド・ハンターのかつて唇を割り開いて出よう
とした言葉は噛み砕いておいた。学園においては当たり前、暗黙の
了解なんだけど、仕方ない。

「うえつ、マジ？ だって、それって敵同士じゃん？」

「聞いたことないの？ 最も多くアンデッドとネクロマンサーを葬
り、今も記録更新中の偉大なるハンターがネクロマンサーと結婚し
ちゃつた話

「伝説の男ウルフ？」

今もご存命で現役バリバリなのに、『伝説の男』なんて、何か笑
える。生けるレジエンドってことなんだろうけど。

「それがアタシの父親」

「うそつ！？」

父親つていづこは、あまりに希薄な関係だけど、遺伝子上は密接
に繋がつてゐる。

「ヒレイン・ウルフ。それが一応本名。学園じゅあ母方の姓と両方
名乗らされてるけどね」

「両方？」

「あたし、昼間と夜間、両方の授業受けてるから」「うわっ……」

「昼間はネクロマンサーの娘、夜はハンターの娘」
昼には母の姓を、夜には父の姓を、とっても面倒臭い。あたしはただのエレインなのに。

「遊ぶ時間ないじゃん」

「遊ばせる気なんてないんだから当然でしょ?」

ハンターとネクロマンサーの娘、学園はその扱いに困っている。ネクロマンサーの娘として扱いたくても、父は学園に大きく貢献するハンターで、あたしはどうちかって言つと父の血を多く継いでいる。

学園はあたしを、ハンターとしてのあたしを必要とせざるを得ない。なんて皮肉。

「エレインは何で今まで実地訓練に来なかつたの?」

「居残り授業の常連だつたから」

あたしが他のハンターやハンター訓練生と衝突すると学園は思つてゐる。大体、あつちから突つかかつてくるんだけど。

それで、あたしは悪くないのにいくら消化してもしきれないくらい居残り授業が溜まつてゐる。

素行不良はあたしのせいじやない。環境のせいだ。

「じゃあ、何で今日は単独なの? 先生もいないし」

実地訓練は数名の訓練生と教官(現役のハンター)が同行する。場合によつては学園所属のハンター(要するにただの卒業生)も経験積むために来る。

「あたしがここにいるのは任務。聞いてなかつた? 余計な手出しをしたら、死ぬわよ」

訓練なんて馬鹿馬鹿しい。これは正式な任務。

本来は卒業して立派なハンターになつてからだけど、十八になつたら受けられることになつてゐる。勿論、学園が承認すればだけど。そんなわけで、あたしは一度も実地訓練に連れてきてもらつたこ

とがないのに、十八の誕生日に任務のプレゼントをもらつた。

尤も、非公式の仕事ならやつたことがある。学園の周囲に出たアンドツドを何度も葬つてゐる。ネクロマンサーとも会つたことがある。

課外授業として。

つまり、学園は“グレイヴ・キーパー”にあたしの存在を知らせたくなかつたつてこと。

それでも、今回“グレイヴ・キーパー”を使ったのは、学園側に被害を出したくないからだと思う。

今回の任務はあまりに危険で、特殊だから。

「任務？ ただのアンデツド狩りじゃないの？」

「それはあんたには関係ない。ただあたしを目的地に運べばいいだけ。運賃分のお話はしたでしょ？」 運転手さん

“グレイヴ・キーパー”になんて期待してなかつたけど、これは本当に期待はずれ。でも、とりあえず死なないとは思う。学園の読みが正しければ、だけど。

「私はヴィツキーだよ？ ヴィツキーなんだよ？」

そう言えば、そんな名前だつたつけ。どうだつてい！

「うーつ…………何か喋ろーよー」

どつちが子供かわからなくなつてきた。

「喋り疲れた」

「全然喋つてない！」

あたしは別に無口つてわけじゃない。
でも、普段は大体発言権がない。

「精神統一」

これは“グレイヴ・キーパー”的人間ならわかると思う。
奴らを相手にするには平常心が必要だから。

「…………MPと付き合わないの？」

ダメだつた。

でも、無視。こうなつたら、つるさくても聞かないフリをするしかない。

あたしは、“嘘吐きマドンナ”を一時間無視した実績がある。

たつた一時間？ とんでもない。彼女の方が一時間我慢できなかつたつてだけ。あたしは一週間でも我慢できるの。

散々、ないとばかり吹聴して、しまいには手を出した。

明らかに彼女に非があるので、それであたしの課外授業がまたプラスされていくってわけ。

あたしはいつもハンターのくせに頭が悪い連中と反省文を書かされている時に彼女はパーティー。きっと、彼女の分の罰は全部あたしが受けてるのに、彼女から見返りを貰つたことはない。欲しくもないけど。

「MPってHレインが好きなんぢやないの？ マドンナの感じだとそうだよ？」

“ミスター・パーフェクト”Hドワード・アームストロング、女の子たちは彼のことを嫌いな女なんていないと思つてるけど、あたしは違う。

「あんまり、彼の話、しないでくれる？ 虫酸が走るから」

「え？」

「あたしたち、とっても仲が悪いの。彼があたしを学園中の笑い者にしてくれたから」

“嘘吐きマドンナ”も“ミスター・パーフェクト”も同じく“ムカつく。ムカつくの種類が違うけど、ムカつく。

あたしが“ハーフ・ブラツド”じゃなければ、マドンナになれた？ ううん、そんなことはない。あたしは別にイケてる女の子じやなくたつていいい。だって、彼女は全然イケてないから。

「あたしは連日、寝不足なの。まだかかるなら、あなたのつるすさぎの独り言を子守歌に一眠りするけど」

「もう着くよ」

サイアク。サイテー。別にいいけど。だって、あたしにこいつことなんて一つもないから。

Happy Birthday Dear Elaine .

着いたのは墓地、車から降りて周囲を警戒する。

そして、何となく時間を確認する。良い子は眠る頃なのに、悪い奴は寝なくて、厄介な奴が這い出してくる。

「あのさ、Hレイン。一応、言つておくと、こゝは、最近、アンデッドより厄介なのが出るんだよ? あ、ネクロマンサーって意味じゃなくてね」

親切のつもりだらうか。そんなことは知つてゐる。

その厄介なのが、誰なのかも。よく知つてゐる。「うんざりするぐらいいに」。

「その……人間が邪魔してくるの。若い男、イケメンって話だよ。アンデッドを守る騎士って感じだつて。うちの人間も何人かやられてる」

イケメン? 馬鹿げてる。

いつからあいつがイケメンになつたんだろう。

「でもさ、敵にイケメンがいるのに、うちはイケメンがいないなんて」

「黙つて!」

殺氣、あたしは咄嗟に彼女を後ろに突き飛ばす。

そして、前に踏み込んで、腰から抜いた剣で飛んできたナイフを弾き返す。

アンデッドはこんなことしない。できるはずがない。

茂みの奥からそいつは出てきた。あたしは更に距離を詰めて、喉元に剣を突きつける。

「相変わらず、とんでもねえ反応速度してるぜ」

あなたは相変わらずわけわかんないわよ。

心の中で呴いて、睨む。あたしの人生はこの男のせいで何度もか変

化した。今もサイアクの方向に転がり続ける。

「そいつだよ、最近、邪魔してくる奴！ ってか、知り合い？」
ライトでそいつを照らして、ヴィックキーが叫んでる。

そう、こいつのことをあたしは知ってる。

だから、任務つてわけ。

本来はアンデッドを断つための剣、その先でそいつは笑った。
何をするか、何を言い出すかと思えば、そいつは口を開いて、歌
い出した。

あたしは、そいつの歌声なんて聞いたことがなかつたけど、どう
せ、音痴なんだろうって思つてた。

いつもメロディックじやないのを好んで聞いてたみたいだし、と
にかくこれは意外だつた。

何て言うか、セクシー。

こんなシチュエーションでなければ、こんな歌でなければ、尻の
軽い女みたいに、陳腐な映画のカツプルみたいに、過去のことなん
かなかつたみたいに、抱かれてもいいなんて思つたかもしれないぐ
らいに。

そう、それは墓地には、とつても不似合いな歌、ハッピーバース
デー・トウゴー。

死者が蘇生したつてそんな歌は歌わない。

ハッピーバースデー・ディアエレイン。

歌が終わつたつて吹き消す蠟燭はない。あるとすれば、この男の
命の灯かもしけない。

「あんた、歌上手かつたんだ」

誕生日を祝つてもらつたからつて別に嬉しくもない。誰も祝つて
くれないけど、それでいい。この男じゃなればもう少ししちだつ
たかもしれないと。

父さんからだつて、任務に合わせてシンプルなカードとの剣を
貰つただけ。

アンデッドを斬るための剣で、最初に斬るのが人間なんてどうかしてる。それもこの男なんて皮肉にもほどがある。

趣味に合わないドレス（去年まではそつだつた）とかよりましたけど。

「この日を待ち望んでたからな」

「この日のために、わざわざボイトレにでも通ったの？ 馬鹿みたい」

もうちょっととて日付は変わるけど、今日はあたしの誕生日、でも、なぜ、この男がそれを待ち望むのかはわからない。そもそも、この男と対峙する現状からわからない。

「素敵！」

場違いなのが一人、振り返れば日を輝かせてるんじゃないかつて声。

「あんたは黙つて！」

そちらを見ずに言い放つ。この男から日を離すのは危険すぎる。「あんたが学園を出て、散々暴れ回って、先生たちはあんたが十八になるのを待ち望んだ あんたの処刑命令を下せるのをね」

これは学園の問題。“グレイヴ・キーパー”は関係ない。

でも、学園の関係者をあたしに付けなかつたのは何か理由があるはず。

学園は、所属するあたしでさえ欺くから。

「読み上げる必要なんてないでしょ？」

あたしは剣を持つてない右手で懐から書状を出して、見えるよう開く。

書いてあることなんて、多分、この男には関係ない。

「イヴァン・ブラッドリー、あんたを学園への反逆罪で処刑する」

そう、イヴァン・ブラッドリー、ムカつくけど、あたしの初恋の男。キスだけ残して消えたサイマー男。

あの日、あいつは学園から脱走して、それからネクロマンサーに荷担した。それは学園に背く重罪。学園はアンデッドを葬る。危険

なネクロマンサーを処刑する。だから、その危険なネクロマンサーに肩入れするこの男は元学園のハンター訓練生だろうと処刑対象になる。

実際はもうちょっと複雑で、この男に学園のハンターが何人かやられてるらしい（学園は不祥事を隠蔽したい）し、元々の素行不良のせいで、更正不可能と判断されたってわけ。

悪い芽はさっさと摘まなければ、悪はあつという間に蔓延る。この男から情報を引き出せるとも思っていないのだらう。尋問して絶対にゲロしない。

まあ、戦争狂みたいな男で、ハンターの道を選んだのも、アンデッドとかと戦いたかつたってだけ。そんな奴を入学させた学園にも問題があると思うけど。

どうせ、今度はハンターと戦いたくなつたんだろう。

「その剣を下ろせ、エレイン」

敵にそう言われて素直に従う奴なんていない。

「あんたの言うことなんて聞くと思ってるの？」

「疲れるだろ」

「ご心配どうも。下がりもしないあんたはどうかしてやる」

後ろには何もないのに、喉元に切つ先を感じているなんてどうかしている。

「この剣を向けた瞬間にバックステップで回避できたはずなのに。『てめえから逃げるつもりはねえ。ただ、少し話がしてえんだ』あの時はあたしから、逃げたくせに。

「あんたに、その権利があると思つてるの？」

「理由、知りてえんだろ？」

「それを聞く権利があたしに『えらんでいるとでも？』

処刑命令を突き付けてきたつてことは、若干横暴だとは思つけど、この男に隙をとれるなつてことだと思つ。あたしにできると思つているのかはわからないけど。

「どうせ、てめえはいつだって、俺を斬れる。だったら、いつじて
る必要もねえだろ」

それは事実。

「俺の誕生日、日付が変わった瞬間、何を思ったかわかるか?」

「『よし、プロポーズするぞ!』とか?」

答えたのは、あたじじゃない。わかるはずがない。

「クイズ大会じゃないんだから、あんたは黙つて!」

「やつと始まつた、だ」

ヴィックキーなんて、まるで気にしてないみたいにそういうは言ひ。

「そして、学園は今度はお前の誕生日を待ち望んだ」

「あたじが処刑の任務を受けられる歳になるのをね」

正式な任務を受けられるのは十八から。別にアンデッドや処刑リストに載ってるようなネクロマンサーなら、その前から殺せるけど、これは別。

「日付が変わった瞬間、何を思ったかわかるか?」

「じゃあ、今度こそ『よし、プロポーズするぞ!』だよ」

答えたのはやっぱりあたじじゃない。

どこから、そんな馬鹿な答えが出るのかわからない。

「やつと終われる、だ」

「あんたに破滅願望があるなんて知らなかつた」

破壊願望はあるかもしれないけど、それが自分に向かうような男
じゃない。

「元氣そうで何よりだ、エレイン」「

「おかげさまで。あんたは随分機嫌がいいじゃない」

「いつのことばよくわからない。でも、ここまで機嫌がいいのは
初めてだと思つ。いや、大体いつも不機嫌そだつたし、そんなに喋らないし。
てめえに殺されるなら、本望だからな。そのために今日を待つて
いたんだ」

「ああ、そう。あんたの望みを叶えるなんて癪だけど」

なんで、あたしに殺されたいのかわからない。でも、あたしはやるしかない。学園側は何も言つてこなかつたけど、この任務に失敗して無傷つてこともないと思つ。この先、ネクロマンサーの娘として扱われるかもしね。

「理由も聞かねえのか」

「聞いたって答えないでしょ、あんたは」
あの時だつてそうだつた。聞いて答える男なら、何のわだかまりもなかつたはず。

「話は終わつた？」

「必要なことはあの時に伝えたからな」

あの時、忘れたかつたことがぶり返す。

必要なことは、あたしには伝わつてないのに。

不意に殺氣を感じた。この男からじやない。
もつと後ろ、ネクロマンサーとかアンデッドじやない。
多分、学園のハンター。あたしを囮にしてるんだと思つ。
引きつけておかなければいけない。

「武器を抜いて」

あたしは再び剣を構える。イヴァンは動かない。
まさか、意図に気付いた？

「あんたは大人しく斬られるタマじやないと思つ」
「確かに、それはおもしろくねえな」

「大人しく捕まる氣があるなら、それでもいいんじやない？ 泣きながら全部グロしちやえれば、処刑は取り消しになるかもね」
「残念だが、それはねえ」

そう言つてイヴァンが剣を抜く。

やつぱりネクロマンサーに荷担しているだけあつて、そいつの武器は対アンデッド用の剣とは異なる。

聖なるお言葉なんて刻まれてない。いや、剣じやない、刀。日本

刀。どこで、そんなクールなブツを手に入れたんだか。

「エレイン！」

ヴィックキーが叫んだ。そう言えば、彼女が銃を所持していたことを思い出す。彼女に撃たせるのはまずい。

「これはあたしの任務。あんたに攻撃する権利はない！」

援護なんていらない。これは、あたしとこいつの戦いだから。

それから、どちらからともなく斬りかかって、鋭い音がする。剣が打ち合わさる音。日本刀は打ち合いには向かないって聞いた。いかに、あたしを斬つて失血させるか。でも、そいつはあたしを斬り付ける気配もない。

だつたら、あたしは刃こぼれさせるほど打ち合いに応じてやればいい。

多分、その隙を彼らは狙っている。彼らはあたしには殺せないと思っている。

いきなり処刑命令なんて、やっぱりおかしい。

その時は突然やつてきた。何度も何度も刀と剣がぶつかり合つて、お互い距離をとった時、風を切る音が聞こえてあたしはとっさに下がつた。

矢はあたしの目の前を通過した。でも、これはイヴァンの援護じゃないって確信していた。

彼は確かにあたしを狙っていた。けれど、こいつはそんなフェアじゃない戦いを望む奴じやない。

それに、その矢はただの矢じやない。本来はアンデッド用の特別な矢。

大体は剣か銃を使うけど、ボウガンを好んで使う人間をあたしは一人だけ知ってる。その狙いの正確さも。

そう、学園のハンターは処刑対象のイヴァンではなく、処刑命令を受けたあたしを狙っている。

「ハレイン！」

この場合、あたしはどうするべきなのか。

正直、あたしがイヴアンに勝てる確率は低い。こいつは学園の元首席。体術に長けてて、パワーじゃあ絶対に敵わない。

そして、学園のハンターがなぜかあたしを狙っている。墓地にアンデッドの姿なし、ネクロマンサーもあらず。人間だけなんて馬鹿げた状況。

「俺の処刑が目的じゃねえのかもしれねえな」

そいつは笑う。笑い事じゃない。

もう一度、矢が飛んでくる。やっぱり、あたしを狙っている。彼に止めさせようとしても、理由を聞こうとしても無駄。他のハンターがあたしの動向に目を光らせている。

イヴアンが彼をどうにかしてくれるのを期待するのも無駄。多分、あたしはそれをやめさせなければいけない。

だとしたら、逃げるべきなのか。

否、そうしたら、あたしは任務放棄つてことになる。

茂みの奥から彼が立ち上がった。ヴィックキーがライトを向ける。やっぱり、そこには学園のマークを胸に付けたボウガン使いが嫌な笑みを浮かべていた。

だけど、彼に気を取られるべきじゃなかつた。姿を見せたのは、自分に引きつけるため。ヴィックキーはまんまとそれを助けた。くそつ！

反対側から殺氣を感じた時には遅かつた。学園のハンターは一人じやないつて、普通は単独行動しないつてわかつてたのに、油断した。

どさくさに紛れてあたしを退場させる気だつて、わかつていたはずなのに。

体に鈍い衝撃があつて、でも、それは予想と大分違つた。

すぐ側に地面を感じる。そして、覆い被さる体……イヴァン。

「なん、で……」

わけがわからなくて、どうにか、この場を逃れる方法を考えなければいけないのに、混乱してて、何でイヴァンがあたしを助けるのかつて、その疑問でいっぱいだった。

「チツ……」

イヴァンの舌打ち、あたしを庇つて、そいつが無事なのかはわからない。わかる前に、銃声が響いた。

「よくわからないけど、こんなのは変だよ！」

発砲したのはヴィックキーだった。続いてうめき声がする。それから、近付いてくる足音、去っていく複数の足音。

「エレイン、大丈夫？」

ヴィックキーが駆け寄つてくると、イヴァンが離れた。

「イヴァン！」

ヴィックキーに支えられながら、そいつの背に声をかける。あたしは彼の処刑命令を受けているのに、聞きたいことは色々あるのに。

「邪魔が入つて萎えた。次に会つ時、てめえが俺を殺さねえなら、俺がてめえを連れて行く　じゃあな」

今度は愛してたとは言わなかつた。言わなくていいけど。でも、連れて行くつて何？

あの時は、あたしを置き去りにしたくせに。

「エレイン、早く行こう？」

ヴィックキーが腕を引っ張る。彼女からは硝煙の臭いがした。やっぱり、彼女は本当にハンターだったみたい。

帰り道、ヴィックキーは何も言わなかつた。

行きにあれだけ喋つて、燃料切れつてことはないと思つ。
「なんで何も聞かないの？」

沈黙を望んでいたのに、あたしは馬鹿なことを聞いた。
「だつて、聞かれたくない、って顔してるから」

「行きだつて、そうだつたと思つけど」

「今のエレインは無理してゐるから」

「無理、そつなかもしれない。」

ただのうるさい馬鹿女じゃないつてことは、もうわかつてゐる。

「……ありがとう、ヴィックキー」

あたしにも丸つきりプライドがないわけじゃない。だからこそ、わかる。

今は彼女に感謝しなければならない。

尤も、それまでのことを説ぎるつもりはないけれど。

「もし、学園の人間が來ても、余計なことは言わないで」

「わかつてゐる。そんなに信用ないかな？」

そりやあ、口軽そうだし、ハンターだつてのが悪いジョークみたいに思える。

「マックにもハンターらしくないつて言われるんだけどね。私にはりに誇りもあるんだよ？」

その誇りが何なのか聞くのはやめておくことにした。

「マックつて恋人？」

「あ、うん」

「……いたんだ。恋人」

「冗談のつもりだつたのに、なんか複雑な気分になつた。一瞬、ひらりと動かされた右手の薬指には指輪。

「ほら、オフィスにいたじやん。メガネの」

「あの、いかにもデスクワーク専門のクソ真面目そうなのが？」

「その通り過ぎてなんにも言えないや」

「あんたから猛アタックしたとか？」

「よくわかるね、エレイン」

別にあたしが凄いわけじゃない。見たら誰でもわかると思つ。

オフィスに戻つて、ヴィックキーはひどく驚いて固まつてしまつた。

「うそつ、なんで？ 実地訓練？ 緊急？」

そう思うのは無理もないかもしだれない。

行きに散々話題にした“MP”こと“ミスター・パーフェクト”

エドワード・アームストロングがそこにいたのだから。

「あたしは囮だつたつてことでしょ？」

あるいは、罷とは言えるはずがなかつた。

彼は学園側の人間だから。

けれど、彼は首を振つて、微笑む。

「俺は君のサポートにきたんだ」

サポート？ どの口が言うんだか。

「今更？ 監視の間違いでしょ？」

「君は色々誤解しているよ」

彼は困つたような顔をするけど、誤解なんかじゃない。ただ理解の壁があるつてだけ。

「それで、聞きたいことは？」

あたしは適当な椅子に座つて問う。

どうせ、尋問されるならこつちから仕掛けた方がまし。

「やっぱり、イヴァン・ブラッドリーに戻る気はないんだね？」

彼も処刑命令を受けたのだろうか。

どちらにしても、わかつてて問うのは質が悪い。

「戻る氣があると本気で思つてたなら、とってもお幸せな人ね」

「そうかな？ 彼にもそういう気持ちがあると思つよ」

「居場所がないって顔でショットカット学園を抜け出してた男なのに？」

「あいつは、そういう男だつた。戻る気が欠片でもあるなら、あんなことは絶対にしなかつたはず。」

「君は俺なんかより、彼のことを知つてゐるんだろうね」

「それはもの凄く皮肉に聞こえた。でも、文句を言つ前に遮られた。」

「え？ なに、あいつとそういう関係だつたの？」

「ただの同級生。学園の中じゃあ一番仲良かつたつて言い方もできるけど」

「そう、あの時はそうだと思つてた。あいつが、それを壊すまでは。君はよく彼の部屋に忍び込んでいた」

「堂々と遊びに行つてた。つて言つうか、入り浸り」

「それ、はつきり言つちゃうんだ……」

「忍び込んでたなんてとんでもない。そんなことはほしない。」

「あいつ、ルームメートいなかつたから、職員寮よりはましだと思つて」

「あたしにはハンターとネクロマンサー両方の血が流れてるから、どっちの寮にも入れてもらえない。」

「別に人種が違うとか、そういうわけでもなく、どちらも人間なのに、変な話。」

「でも、結局は、あいつは出でつた。未練なんて欠片もなさそつた」

「いいや、そこに君がいるのなら、彼は戻りたいとも思つただろうね、何度も」

「何それ？」

「わけわかんない。」

「あいつは、戻る気がないから、全て壊してつた。」

「だつて、彼は君のことが好きだつたじゃないか。いや、今でも君を想い続けてるはずだよ」

「そんなわけないでしょ？」

「この男は何を言つてるの？」

「なぜ、それを知つてるの？」

あの時、確かにあいつは、愛してたと言つたけど……

「俺も君のことが好きだったのに、彼はよほど俺のことが嫌いだつたのか、散々牽制されてね。俺は君からも嫌われてしまつたけど」

「白々しい」

確かにあたしはこの男を嫌つてると思われてる。

実際、それほどひどく嫌悪してるわけじゃないけど、好意は全くないと言える。

「俺は一度君を傷付けてしまつた。でも、そうするしかなかつたんだ」

本当に白々しい。

あたしは、そんな表情に騙されない。

「人気者してくれて、ありがとう。『ミスター・パーフェクト』

「やめてくれ、Hレイン。君には、君にだけは、そう呼ばれたくな

いんだ」

それは、もう何回言われたかわからないけど、やめるつもりはない。

大体、あたしがそう呼び始めたんだし。

あたしじゃなきや悪い氣はしないってこと？

「毎日毎日、みんな、飽きもしないで、あたしの噂で持ちきり。でも、あたしには全く心当たりのないことばかり。それって不思議よね？」

火のないところに煙は……って言つけど、火を点けたつもりはない。

「女どもは敵意に満ちた視線を送つてくるし、野郎どもは一発ヤろうぜつて誘いをかけてくる」

あたしと付き合いたいなんて言つ奴はいないけど、一発やるのは別の話らしい。

単に、試してみたいっていう好奇心に過ぎないけど。

そう彼らに思われるの全部、この男のせい。

「あたしがバカنسにも行けないで、みんなに馬鹿にされてる頃、あなたは小さなビキニを付けた女の子たちに囲まれてた」

「俺はみんなとプールに行つたりしていないよ」

「でも、あたしはシミだらけになるのがわかつてプロンズ肌にしたりしない」

彼の言うことは無視する。そんなの信じない。

あたしは彼の言うことを信じるべきじゃないって思い知ったから。「ダンスパーティーの時、アンジエロ・キエーザさえパートナーを決めたのに、あたしには誰からの申し込みもなかつた。でも、あんたはパートナーのオーディションをしなければいけないほどだつた」「君こそ真実を言つてないじゃないか。俺は君に申し込んだのに」確かに真実は言つてないかもしれない。

でも、それが全くの嘘だとは思つてない。

「だつて、あたしはダンスを練習する暇もなくて、オーディション受ける権利もなかつたもの」

「オーディションなんてしていない。君は本当に虚言癖があるらしい」

馬鹿な話をしてるとは思つ。

でも、彼とあたしは仲間じゃない。あの男のこと話を必要もない。

「それに、キエーザにパートナーはいなかつた。彼は一人で踊つていたよ、あたかも相手がいるように」

彼の言葉にはアンジェロへの敬遠が滲んでいる。その場面では彼は友人たちと笑つてただろう。

彼はちつともパーフェクトじゃない。

「いたわよ、ナタリア・デ・アミーチス」

「彼女はただの噂だ。ダンスの亡靈だよ」

ダンスパーティーの時期になると現れるっていうナタリア・デ・

アーニー・チス。彼女はパーティーの前に命を落とし、今も未練を引きずつて学園にいると言わされている。

「それが本当にいたとしたら？」

アンジェロはハンターの中でも“変人”だと言われてる。けど、あたしはそうとは思わない。彼には他よりも優れたところがある。彼はハンターであり、サイキック。つまり、亡靈が見える男だ。アンデッドは動く死体だから誰にでも姿が見えるけど、彼にはその靈魂さえも見えてしまう。

「クリスマスには、あんたはあたしにピアスてくれた。自分が突っ込んだ女にそいやつて印付けてたの？」

「あれは君が欲しがっていたみたいだから」

確かに、彼がくれたドクロのピアスはあたしがカタログで見てて欲しいと思ってたものだった。

でも、彼から貰つても嬉しくなかつた。

「バレンタインにはカードをいっぱいもらつたわよね。でも、あたしが誰からももらえないからって、お情けのつもりだったの？」

バレンタインに彼は薔薇の花束をくれた。

でも、それはあたしを惨めにしただけだった。

そう、彼がすることの全てがそういうことだ。

彼はあたしを放つておくべきなのに、好きだなんて言つて、状況を悪化させる。

「あんたって、本当に完璧だわ」

普通の女の子だったらとつぶくに足を開いてると思う。

彼からプレゼントを貰つたなら、その迷惑に気付かずに簡単に墮ちてしまうと思う。

でも、あたしは、そうなれない。

「学園一のマドンナがいつもあんたを、正確にはあんたの足の間にぶら下がってるブツを物欲しそうに見てるのに、あんたは見向きもしない」

アンナ・メインソンはいつだって、彼が欲しくて仕方がないらしい。

別に彼でなくともいいんだと思う。完璧な恋人がほしいだけ。頭が良くて、イケメンで、ハンターとしても優秀で……それにぴつたり当てはまるのが“ミスター・パーフェクト”だつたつてだけ。

「別に、あたしはあんたがゲイだつて何も変わらない」

「どこから俺がゲイだつていうことが出てくるの？」

「イヴァンのこと、気にしてるみたいだから」

「君は本当にマジドかもしないね」

すっかり呆れたように彼は肩を竦める。

そんな仕草も計算されたように完璧。

ヴィックキーも、全く入り込めずに黙つて聞いてる。彼女の場合、口を開けば、災いが降りかかるから、それが賢明だと思う。

「ありがとう、褒め言葉ってことにしといてあげる。棒や石でたしの骨を碎けても、言葉であたしを傷付けることはできないから」「君を傷付けたいはずがないじゃないか」

「でも、もう何度も傷付けられてる」「あたしを傷付けたことは彼自身が認めた。

「俺が好きなのは君だ」

そんなの、信じない。どうかしてる。

「入れられた時から、まともな学園生活なんて無理だつてわかつてた。特例ばかりで、アンナ・メイソンみたいなのに絡まれるのもわかつてた。でも、あんたのおかげで、想定の範囲を超えた」

伝説のハンターの娘でも、忌々しいネクロマンサーの血をなかつたことにはしてもらえない。

たとえ、父さんがネクロマンサーと結婚した今でも学園から協力を仰がれてても。

それでも、それなりに上手くやり過ごせると思つてた。

「あんたは完璧だわ。でも、自分の武勇伝を完璧にするために、あたしと寝たなんて言うべきじや なかつた」

「違う。そうじゃない」

「何が違うのか、あたしにはわからない。
でも、あたしが言うこととは嘘じやない。事実とは異なつても、
丸つきり嘘つてわけじやない。

彼はそういうことを否定しなかつた。否、敢えてそういうことを
してしまつた。

「マッドと寝たつて、あなたの価値は下がらない。それつて、とつ
ても不思議だわ」

誰もが嫌うあたしと関わつたつて、彼は同じように嫌われたりし
ない。まるで、聖人みたいに。

「だつて、あんたは魔女に誘惑された哀れな王子様だものね。クー
ガーミたいなお姫様がみんな、あんたを、正確には」

「いい加減俺の話を聞いてくれ！」

言いかけたところで、遮られた。

彼が声を荒らげることなんて滅多にないのに。

「とにかく、みんなが、あんたを慰めたいと思つてる」

ネクロマンサーの女の子でさえ彼を欲しがつてる。夜の行動が制
限される欲求不満な彼女たちにとつて彼は最高の夜のお供。

それなのに、彼は、あたしを散々笑わせてくれる。

「アンナを黙らせるにはそれしかないと思つた。君を守れると思つ
ていた」

「とんだ思い上がりだつたわね、『ミスター・パーフェクト』」「

「信じてほしい」

懇願するような声、でも、その意味がわからない。

「あなたの何を信じればいいの？」

それは、彼を黙らせるのに、十分だつたらしい。

「エレイン……」

彼が何かを言おうと口を開く。ヴィックキーが何かを言いたそつこ
してゐる。

でも、その空氣は突然張り詰めた。

「エレイン・サンティニー　お前を連行する」

学園のハンターだった。それも、かなり幹部クラスの。
それが、ゾロゾロと入ってくる。四人。

おそらくはあの墓地にいた人間だ。あの『使いはいないけど。
皮肉の一いつや二いつ吐きかけてやりたいのに、自分を不利な状況に
持ち込むのは得策ではない。

「待ってください。どういうことですか？」

“ミスター・パーフェクト”が問いかける。

そんなの無駄なのに。

彼はきっと、足止めに利用された。あるいは、あたしから情報を
引き出すために。

「内通の容疑、と言えばわかるな？　エレイン・サンティニー！」

淡淡と告げられるけど、驚きはしない。

こうなることはわかつてた。初めから。

彼らは、この機会にイヴァンと一緒にあたしを葬りたいと思つて
る。

だから、ハンターとして送り出したくせに、今はネクロマンサー
として、あたしの名前を呼ぶ。

椅子から無理矢理立たされて、腕を後ろ手に手錠をかけられる。
だけど、抵抗すれば面倒になる。ヴィックキーも唇を噛みし
めてる。

「内通なんて……！　誤解です！」

必死に訴えても無駄。無駄。無駄。

「ごくろうだったね、アームストロング君」

ほり、あんたは利用された哀れなピエロなんだよ。

Like father, like daughter.

押し込まれた車の中はとにかく居心地が悪い。

両隣を倒して飛び降りようとか、全員蹴り落としてカージャックするとか、映画みたいなことはできない。

彼らを相手に冗談で時間を潰すのも馬鹿げてる。

だから、死人のように黙つて、目を閉じてることにした。ふと、脳裏をよぎるのはイヴァンのこと。思い出なんて可憐らしいものじゃない。

今となつては、ただ苦々しいだけの記憶。

* * * * *

あたしが現れるなり、そいつは変な顔をした。
嫌そうな、会いたくない相手に遭遇したような顔。

もしかしたら、始まりの場所を終わりの場所にしたくなつたのかもしぬれない。

後から現れたのは自分の方なのに。

屋上はあたしが占有してた。立ち入り禁止で、たまにそこでやる奴らがいるつて噂があつたけど、あたしが現れるようになると、本当に立ち入り禁止になつたみたいだつた。

でも、イヴァンは現れた。何度も。

あたしが先だつたり、イヴァンが先だつたり。でも、取り合つてたわけじゃない。一緒にいると何となく話をした。

一番最初に声をかけてきたのはイヴァンだつた。

「いつでも、消えてやるわよ。あんたがこの主になりたいならね
何となくムカついて吐き捨てたらまた変な顔、この男のことはよくわからない。」

「いきなり何だ？」

イヴァンは不機嫌そうに顔を顰める。

「あたしが煩わしいんじゃないかつて」と

「んなことは言つてねえだろ」

いつも機嫌は良くないけど、不機嫌になるとしたら、あつとあたしのせい、そんな風に思つてた。

否定するくせに、やつぱり煩わしさでわけがわからない。

「あんたはうざければ自分でやれるわよね」

別に付き合つてるわけでもないし、嫌われるとか何とか、そういう不安があるはずもない。

ただ、こいつがあたしの目の前に現れてから、くだらない監獄暮らしのような学園生活が少しさ面白くなつたから、縁が切れたら退屈になるつてだけ。ただそれだけ。

「わけわかんねえ」

「あんたの方がわけわかんないわよ」

イヴァンは言つけれど、そもそもの理由がわからない。変な顔の理由が何も見えてこない。

「誰か好きな子でも出来たの？」

「そんなんじやねえ」

直球を投げてみたけど駄目だった。

男にも”あの日”があるの？ そんなバカなことを考へるくらい不可解。

「てっきり恋煩いかと思つたのに」

「誰が恋なんかするかよ」

あたしたちは、どうせ真っ当な生き方はしない。

恋なんて気が狂つたとしか言えないけど、イヴァンに限つてそんなことはなかつたみたい。

でも、やっぱり今のイヴァンがわからない。

突き放すわけでもなく、いつものように返してくれるわけでもない。

「そうよね、種を撒き散らすしか脳がないんだから」

「ムカムカして当つけがましく言つてみた。

何か言い返してくれると思ったのに、イヴァンは何も言わなかつ

た。

また学園まで長い道のりを行くんだと思つてた。でも、通されたのは彼らが借りてるホテルのようだつた。

その一室でゆつたりと、けれど、確かな貫禄を持つて腰掛けてたのはあたしが一番よく知つてて、一番よく知らない男だつた。

”伝説の男” ウィリアム・ウルフ、全くの予想外。

ホテルに入つた時には手錠は肩からかけられたコートで隠されてたけど、この部屋に入る前に外された。

あたしは用意された椅子に座つて、ただ向かいの男を見つた。

「好きに口を開くがいい」

「それで、全部、あたしに都合が悪い方に解釈してくれるわけ？」

ミスター・ウルフ

今、この状況では、彼はあたしの父親なんかじゃない。

「隠しカメラやマイクはない。お前は私の前で嘘は吐かないだろ？」「そう思つてるのはあんただけ」

娘だからなんて特別扱いはあたしには適応されない。

でも、いつも嘘は吐かない。本当のことを言わないのでだけ。

”伝説のハンター”が尋問なんてちんけな仕事するなんて思わなかつた

他の奴らなら、」の男を前にベラベラと余計なことまで喋るだろう。

」の男の武勇伝が聞きたくて仕方がなくなるかも。

「お前は私の娘、そして、誇りだ」

「違う、あなたの娘じゃない。キアラ・サンティーニの娘よ

エレイン・サンティニー、彼らはあたしをそう呼んだ。エレイン・
ウルフじゃない。

「いいか、エレイン。誰も理解してはくれないが、キアラは良いネ
クロマンサーだった」

そりゃあ、誰も理解しないよ。ネクロマンサーは敵、悪、それが
常識。同じ人間でも闇に手を染めた者だって教えられる。

「お前は私の娘であり、キアラの娘だ。どちらの誇りも受け継いで
る」

「誰もそんな風には思っちゃいなこよ」

あたしはどうやらでもあって、どちらでもない。中途半端にしたの
は、この男。

「お前の信じる道を進め」

「そつやつて、あたしを消し去ろうとしてるの?」

「そうじゃない」

彼は首を横に振った。

「今回の任務はお前には辛いだろ?」

「あんたの仲間はあたしを狙つた」

「ごまかしなんてきかない。

わかつてるんだ。あたしが学園にとつてどれだけ厄介な人間かを。

「メイソン派はあたしのことが大嫌いなんだよ。娘の嘘を鵜呑みに
してさ、あたしを目の敵にしてるの。あんたが目障りだから」

アンナ・メイソンの両親はハンターで、でも、そのどちらもウル
フには及ばない。

そして、生粋のハンターだと思つてゐるのに、単純に能力だけなら
あたしよりも下と判断されたアンナ……

あたしがいなくなれば、彼らは何もかもうまくいくと思つてる。

それは大間違いだけど、アンナがあることないこと……あること
は大きく、ないことはねつ造して話してくれたせいで、メイソンの
取り巻きはあたしを目の敵にしてる。

リーダーと次期リーダー（遠い未来のだけど）に嫌われないため

だ。

「彼らは私の仲間でもない」

それを聞けたのは収穫だったのかも。

「生きろ、Hレイン」

何で、そんなことを言つのか、わからない。

言われなくたって、父親面されなくたって、あたしは勝手に生きてるよ。これまでと同じよ。アーヴィング

「イヴァン・ブラッドリーを救うのはお前だ。お前だけが彼を救える」

何で、ここであいつの名前がでてくるのか、わからない。

あたしが、あいつを、救う？ 何、それ？

「さあ、行け。捕まるなよ」

連続して投げられた物をキャッチして、驚く。一つ目はあたしの物。剣だ。二つ目はハンターに支給される特殊な銃、あたしの物じゃない。

本当の誕生日プレゼントってワケじゃないんだろうけど、理由を問う暇はないようだ。

慌てて、ズボンの間に突っ込む。

ドアが乱暴に開け放たれたのは同時だった。

「ウイリアム・ウルフ、エレイン・サンティニー、学園への反逆罪で拘束する」

まるで警察か何かにでもなった気分なのか。

背後に腰巾着を従えて、偉そうにメイソンがあたしの前に立ちはだかる。こちらの考えはもうわかつてゐるだらう。

「言いたいことはあるか？」

腕を捕まれる。背後で身構える気配があつたけど、りやんと空氣は読んでくれるはず。

「娘にもっとましな嘘の吐き方教えてあげたら？ 幼稚な嘘に騙されて、全員馬鹿みたい」

メイソンとその取り巻きはアンナの嘘を鵜呑みにして何でもしちやう間抜け集団。

「知ってる？ 自分の思い通りにするために、あなたの娘が何人寝たか？」

これはアンナの嘘とは違う、紛れもない事実。メイソンの表情が歪む。

「この中にもいるかもね、変態ロリコン野郎が！」

怒りが肌に触れた気がした。あたしはメイソンの股間に蹴り上げ、その隙に取り巻きを剣の鞘で殴り付ける。

そして、最後の一人が倒れた。

「乱暴者だな。私がくい止めてやつたのに！」

拳を握った勇壮な立ち姿で”伝説の男”が笑つた。

暴れ足りなそうでもあつたけど、あたしは走り出す。もたもたしてられない。

「あなたはどうするの？」

走りながら、後ろを走る彼に問ひ。

「私は私の道を往く！」

「ああ、そうですか。別に、一緒に来て欲しくなんかないけどさ。いくら、”伝説の男”でも、メイソン派を殴つたのはまずいよ。状況が普通じゃないから。

「あんたはあたしが殴り倒す。せいぜい死なないでよ！」

あたしを殺そうとして、父親共々拘束しようとした。もしかしたら、この男も殺すかもしない。

学園は信用ならない。全てがおかしくなってきてる。

「誰に物を言つていい？ 私は娘以外には負けはせん！」

言つてくれるじやん。だつたら、打ち負かしてあげる。全部終わつた後で。そうしたら、あたしが伝説になる？

「グッド・ラック！」

そこから先は別々の方向へ走り出す。

あたしの行く先には見覚えのある車。

「エレイン！」

ドアを開けて、彼女は叫ぶ。

「行くよ！」

あたしが乗り込んで、ドアを閉めると彼女は思いつきりアクセルを踏み込んだ。

慌てて顔を茹で蛸みたいに真っ赤にして追いかけてくるメインソンが見えたけど、あたしはきっと逃げられる。

「何で？」

落ち着いたところで問い合わせてみた。

「MPが、あんたがヤバいかもって。学園があんたを殺そうとしてるって」

MP、彼も信用できるわけじゃない。彼女もそうだ。

「あたしはあんたを信じていいの？ ヴィックキー」

「もちろん！」

今、信じられるとすれば、皮肉なことに、”伝説の男” ウィリアム・ウルフだけなのかもしない。

でも、何であっても、あたしはイヴァン・ブラッドリーに会わなきゃいけない。

きっと、そこが全ての始まりで終わりだから。

そうイヴァンはあたしの始まり。

気付けば、振り返る思い出にいつもいるのは、イヴァンだ。

でも、いつ裏切りが芽吹いたのか、わからない。

イヴァンはあたしの噂の陰に隠れてたけど、十分に嫌われ者だった。

好戦的な性格が災いしてた。ハンターを目指すのもそういう理由だった。

でも、”ミスター・パーフェクト”より、ずっとコーエラスだった。

あの時も意外な冗談で驚かしてくれたつづけ。

* * * * *

「ねえ、イヴァン」

「何だ？」

男子寮の一室、イヴァンの部屋で本棚を漁りながら、あたしは問い合わせた。

まるでルームメート、最初こそ何かと文句を言つてたイヴァンもすっかり慣れてしまつたらしい。

本気で嫌がつてたら追い出すと思う。

イヴァン・ブラッドリーはそれができる男だ。

でも、屋上にいる時みたいに、気が向いたら話すだけ。同じ空間に一緒にいるつてだけ。

「ダンスパーティーの相手決めた？」

問えば、ああ、と意外な答えが返つてきた。

近々開かれるダンスパーティーは重大なイベント。

みんな、パートナーと出たり、この機会に告白したり、馬鹿みたいに騒いでる。

「ウソ、イヴァンのくせに」

当然、相手なんか決めてないと思ってたこの男が既に相手を決めてたことにビックリして、あたしは思わず持つてた本を落としそうになつた。

まるで裏切られたみたいな気分。

「相手、誰？」

「ナタリア・デ・アミーチス」

答えるかななんてわからなかつたけど、聞いてみたら意外にありました。

でも、それが冗談だつたつてすぐにわかつた。

「ウソツキ。那人、ゴーストじゃない」

ナタリア・デ・アミーチスって生徒は確かにいる。いた、つて言うべきなのがも。

けれど、それを知つてるのは数少なくて、みんな、噂だと思つてる。

「知つてやがつたのかよ」
イヴァンは舌打ちした。

毎年、ダンスパーティーの時期になるとパートナーを探してホールを彷徨う亡靈がいるって噂。

噂なんて形のないものだけど、あたしはそれが真実だつてことを今日知つた。

「アンジェロ・キエーザが教えてくれた。今年は僕が彼女と踊るんですよ、つて」

ハンターを目指す者の中でも珍しく、アンジェロは自称靈能者^{サイキック}、
だつた。ハンターになるのに、特殊能力は必要ない。
アンデッド・ハンターだからつて、みんな、ゴーストが見えるわけじやない。ゴーストとアンデッドは別。

だから、彼は奇人変人として扱われてる。

彼ほど熱心に教会で祈りを捧げるハンターはいないと思う。
ハンターは別に、神様を信じるからアンデッドを倒すわけじやないから、アンジェロは浮いてる。

「でも、あんたがそんな冗談言つなんて思わなかつた」

イヴァンとは長くないけど、短いつていうほど短いつてわけでもない。

けど、そんなユーモアのある男だなんて知らなかつた。

「俺がんなクソ面倒臭えもんに出るわけねえだろうが」

そうして、イヴァンはあたしが最初に予想してた言葉を吐いた。
だから、あたしも用意しておいた言葉を口にすることにした。

「パートナーになつてもらおうと思つたの」

その瞬間、イヴアンは思いつきり顔を顰めた。

「てめえは決まってるだろ？」

「あたしは決めてない」

イヴアンが誰のことを考へてるかはわかりきつてる。

でも、それは相手がその気になつて言つてるだけで、あたしは何とも思つてない。

「相手はすっかりその気じゃねえか」

甘い声で、極上の笑顔で、君しか考えられないと彼は言う。誰にでもそうなんでしょう？ つて言つと、彼は傷付いた表情をする。

あたしだけ、つてわかつて困らせたいわけじゃない。

彼はあたしに関わるべきじゃない。あたしは彼と関わるべきじゃない。

「彼、今、オーディションで大変なの。パーティーの後の興奮を更に燃え上がらせる相手を品定めしてるの」

「出来レースだ。てめえが受けりやあ即決まる」

この男は何にも興味がないようで、何でも知つてるようないふがある。

「何で、あたしが彼をパーフェクトにしてあげなきゃいけないの？」

”ミスター・パーフェクト”、彼はそう呼ばれてる。

イケメンで成績優秀、学園のマドンナと付き合つてると思われてる。

まあ、前半はこの男にも言えることだつたりする。しかも、頭の良さと強さなら”ミスター・パーフェクト”より上。つまり、彼は全然パー・フェクトじゃない。

「あんな物好きは一生に一人しかいねえだろ？」

「あんたは違うの？」

学園の嫌われ者があたしに声をかけるような物好きと言えば、ここにもいるわけで……

「俺は別に付き纏つちゃいねえよ」

付き纏わるてゐる方だと言いたげだ。

最初に声をかけてきて、それからあたしが構つてゐる。でも、変な顔をしながら、絶対に突き放さない。

あたしたちは学園の嫌われ者。だから、似てるかと言えば、理由は全然違う。

傷を舐め合つわけでもなく、ただあたしは退屈で、こいつは煩わしいことがなくて楽だから、こうして入り浸つてゐるだけ。

* * * * *

友達なんてものじゃなかつた。

恋人でもなかつたけど、イヴァンはあたしをどうしたかったの？

暫く車を走らせて、着いたのはアパート。

「ここは？」

予想はついてたけど、愚かな質問をするしかなかつた。

「私の家。まずは休まなきや！」

グイグイと有無を言わざず、ヴィックキーが引つ張る。

「ここ？」

「そうだよ。」

「灯り、点いてるけど？」

ドアの前に立つて、ヴィックキーがノブに手をかけるけど、それは迂闊な気がした。

「大丈夫」

笑つて、ヴィックキーがドアを開けて、あたしはどうせお腹に手をやつた。そこには、あの男から預かつた銃がある。

「ただいまー」

「帰つてこないんじやないかと思つたよ」

密かに恐れたほど少女趣味でもなかつた部屋であたしたちを迎えたのはヴィックキーの恋人、マックとか言つたつけ？

「同居？」

「ううん、ちょっと頼んでおいたの」

それなら、先に言つてくれれば余計な警戒をしなくて良かつたのに。

いや、それでも、あたしは信じなかつたと思つ。安易に他人を信じられる状況じやない。

「頼まれた通り」

「ありがとー！ マック」

紙袋がテーブルに置かれると重たい音がした。武器ならいいんだけど。

「ヒレイン、お腹空いてるでしょ？すぐ用意するね」

そんな気分じゃなかつたけど、ヴィックキーはキッチンに消えて、マックとやけに睨まれた気がした。

「言いたいことがあるなら、ほつきつ言つてくれる？月並みな悪口じゃあ効かないよ」

アタシの心を真に傷付けたのは、イヴァン・ブラッドリーだけなのかも。

「……彼女を頼む。君よりはずつと弱いから」

文句でも言われるのかと思ったら、ちよつと予想外。いくらい小さな声だからって聞き間違えたりしない。

「わかった。あたしが守る」

余計なことは聞くまい。言つまい。

巻き込むつもりはないというか、巻き込みたくないというか、巻き込まれてほしくないというか……今後も一緒に行動するなんて断固拒否したいんだけど、それでも、彼女は自ら巻き込まれる気がしたから。絶対についてくるだろうから。

「何の話？」

キッチンからヴィックキーが顔を覗かせた。話に入らずにはいられない性分なんだと思うけど、今の話に混ぜたら絶対に面倒になる。

「何でもない」

「じゃあ、僕はこれで」

逃げたな、こいつ。

正直、そう思った。でも、口にしなかつた。

いてもいう理由もない。いられると色々居たたまれなくなるかもしない。

マックは全く気を利かしてくれなかつたのか、目の前で湯気を立てるのはトレーに入ったレトルトのパスタ。変な手料理を食べさせ

せられるよりは、ましかもしれないけど。

それからダイエット飲料。

「……MPがいなくて、安心した」

「正直、いてもおかしくないと思つた。そこまで、じゃないともわかつてたけど。

「うん。だつて、学園の子だもん。MPはMPなりにやるつて言ってたし」

MPに一体何ができるつて言つんだろ？

実地訓練に出た回数はナンバーワン。皆勤賞。でも、彼は一人で何かできるほど強いとは思えない。

アンジエロを馬鹿にしてるあたり、頭が良いとは思えない。奇人変人で厄介な人間だと思われるけど、あたしがそれ以上に厄介な立場にいなければ彼とは友達になりたかった。

「どうするの？」

問い合わせられて、パスタに突き立てたフォークを無意味にくるくる回した。

「できることなんて多分ない」

あたしの世界はぐるぐる回る。あたしはただ、巻き上げられるだけ。このパスタみたいに。

「でも、きっと、あたしが動けば、みんなが動くと思つ」

中心じゃない。けど、限りなく中心に近い。

「そうだね。エレインは狙われてる。どっちからも」

イヴァン含むネクロマンサー側と対する学園のハンター側、その両方があたしの敵。あるいは、もっと複雑かも。

最早、学園のどこまでを信じればいいのか、わからない。メイソン派の独断による排除行動とも取れる。それを学園が裏で支持してるつてのはありえない話ぢゃない。

「信用できるかどうかなんて、そんなの聞くまでもない。ノー。あたしは、イヴァン・ブラッドリーに会わなきゃいけない」

そうしなきや、状況は動かない。

「辛くない？」

ヴィックキーは心配そうな顔をしてる。口周りはトマトソースで汚れてるけど。

「あいつは何かを知つてる」

「危険だよ」

そんなのわかりきつてる。アンデッド・ハンターは楽なお仕事じゃない。危険が付き纏う仕事。だから、ウイリアム・ウルフは英雄視される。

「逃げてちや、何も終わらない」

「そうだね」

ヴィックキーが頷いた。

「私も覚悟を決めるよ。ビームでも一緒に行く。だって、足が必要でしょ？」

「あんたこそ危険だよ。巻き込めない」

我ながら馬鹿なことを言つたと思つた。言つたって無駄なのは、わかりきってる。

「もう巻き込まれてる。それに、私だってハンターなんだから」

「そうだったね、今度はあたしが頷く。」

それとも「ほら、やつぱり」って言つべき？

「しかも、押しの強さで男を勝ち取った頑固者

「その言い方ビリリーだよ」

「尊敬してるつもり、かな？」

あたしには一生できないと思つから。だから、全く違つことが羨ましいのかもしれない。

「まあ、いいや。今日のところは休もう？」

暫く無駄な問答が続くんじゃないかと思つぱりだったけど、その境界はちゃんとわかつてゐみたいで少し安心する。

これでも、少し肩身が狭いとは思つてる。

「ここが安全じゃないとは思わないの？」

「え？」

過大評価はやっぱり良くないのかも。間抜けな声に少し気力が削がれるのを感じた。

「あなたの身元はバレてる。田が覚めたら取り囮まれてるかもよ？」
「学園だつてそこまで非人道なことはしないでしょ？」 イヴァンがここに現れない限りは

間違つてはいない。でも、イヴァン・ブラッドリーっていう人間はとつても厄介な人間だ。仲良じこじこをしていた時でも、あたしはあいつを敵に回したいとは思わなかつた。
それほど面倒臭いことはない。

「イヴァンは頭がいい。しかも、素行不良で、オフィスに忍び込んで資料を盗むくらいは簡単」

とにかく器用な奴だつた。“グレイヴ・キー”の関与は考えればすぐにわかる。オフィスの場所だつて調べればすぐにわかる。あいつはヴィックキーを知つてゐる。“グレイヴ・キー”にだつて、そんなにたくさんハンターがいるわけじゃない。あるいは、誰かを脅して吐かせるつていう手つ取り早い手段だつてある。イヴァン・ブラッドリーを甘く見ると痛い目に遭つ。

「でも、イヴァンはエレインを待つてゐる。だから、そんな面倒なことはしない。必ず来るつてわかつてゐる」

一体、イヴァンを何だと思ってゐるのか。あいつの言つたことじどれだけ真実が含まれてるかなんてわからない。

「学園側はエレインがイヴァンと繋がつてたつて形で捕まえたいんでしょ？」

イヴァンもまた学園の疑惑を知つた上で、彼らを誘い込みたいのかもしれない。

わかつてるのは、あたしはどこへ行つても地獄つてことだけ。

「わかつてゐならしいよ。こっちの作戦決行は今日の夜」

まずは一眠り。眠れば少しほは頭も整理できるかもしない。これ

は重要なこと。十分な睡眠を軽んじちゃいけない。

それに正直くたくた。

「その計画は？」

「ちょっとワクワクしてゐるだけ聞こえるのは気のせい?」

「イヴァンが出来うな墓地に行く。以上」

「サイコー!」

そう、これはサイコーにイカレた作戦。クレイジー。どうせ、あたしにできることなんて限られている。

* * * * *

部屋には暮らしてゐる奴の性格が如実に出る。

そこは居心地が良かつた。あたしの部屋に似てるといひがあるから。

極めてシンプルで、唯一安らげる場所つて言つても良いのかもしない。

「何で、てめえがここにいやがる?」

帰つてきた部屋の主が顔を顰める。プチ脱走から帰つてきたことだろひ。

「退屈だつたから」

別にこの男に用があつてわざわざ不法侵入したわけじゃない。

ただ、何となく自分の部屋にいるのが面倒臭かつただけ。職員寮なんてもろくなとこりじやない。

「警戒心はねえのか?」

イヴァンは呆れている。

多分、男の部屋に単身で上がり込んでとか何とか言つひととど思つけど、愚問だった。

イヴァンだつて何とも思つてないに決まってる。

「何、いかがわしいことする目的であたしに近付いたの?」

「誰がてめえなんかに欲情するか」

イヴァンは不愉快そうに吐き捨てた。

「いつもあたしは恋人なんかじゃないし、肉体関係は一切なし。

友達でもないし、きっと戦友なんて言えるような絆もない。

ただの同級生、そう言い切るには親密な感じもあるけど、単に気が合うだけ。

だからって友達と言えないのは生温い言葉があたし達にはあまりに不似合いでだから。

「じゃあ、何の為にあたしに近付いたの？」

こんな微妙な関係を始めたのはイヴァンから。

もしかしたら、こうなるとまでは考えていなかつたのかもしれないけど、先に絡んできたのは間違いないこの男。

「てめえが女に見えなかつたからだ」「

何て、失礼な。

あの時だつてジーンズにタンクトップにジャケットのお決まりの格好だつたけど、今まで男に間違われたことはない。いくら最近の男は髪が長いとか華奢とか言つても。

大体、あの時イヴァンはあたしのことを知つていたわけだし。

「蠅人形と区別がつかねえ」

「それつて褒めてるの？ 貶してるの？」

「さあな」

ホントわけわかんない。この男はいつもそう。すぐにはぐらかす。深く考えてないのか、単に面倒なのか。両方なのかも知れない。

「あんたつてやつぱり変だわ」

「てめえが言うな。真っ白な女はてめえだけだ」

「どうせ、あたしはバカنسになんて一度も行つたことがないわよ。大体、将来シミだらけになるのがわかつてゐるのに何でわざわざ苦労して焼かなきやいけないのかしら」「

あたしのことが嫌いなレディー達じゃあるまいし。むかつぐ。

みんなはバカنسで焦げてて、競い合ひてゐみたい。

その点イヴァンも白いんだけど。

「はつ、ビキニも持つてねえ奴が僻んでんじゃねえよ」

それで、あたしを黙らせることができると思つたのか。残念。

「持つてるわよ。黒いフリフリの」

「……披露する機会もねえのにか？」

「もうつただけ。“伝説の男”に」

父親になんて言わない。あしたちの親子関係なんて希薄そのもの。

まるで他人。お互いに学園での立場が悪い。

それなのに、誕生日に限らず父親らしいことをしようとしてくる。いずれ『口三』になるもので、今にも切れそうな糸をかねつじて繋げておこなうとしているみたい。

いつも品物選びに付き合わせている事務員の女性の趣味があんまり良くないことをわかつてないし、報われないと思えば何だか可愛そうにもなる。

「つぐづく親馬鹿だよなあ」

すっかり呆れている。この学園に“伝説の男”ウルフを知らないやつなんてまずいな。

イヴァンに限つては憧れも何もないと思つけど。

「つーか、いつまでこる『氣だ?』」

問ひの裏側には『わかつたと帰れ』といつ意味が込められてゐる気がする。

退屈じのぎにきただけで、用があつたわけじゃないことはこの男もわかつてゐるから。

でも、あたしは氣付かないフリ。

どうせ、すぐに言われるに決まつてる。

「朝まで、かな?」

「帰れ」

ほら、冗談めかして言えばイヴァンは即座に返していく。

「あなたが寝てる内に出てくからお気になさりす」

あたしはイヴァンが寝てる頃には授業を受けなきやいけないわけだし。

「何が、お気になさりす、だ

「気にするの？」

「邪魔だってだけだ

細かいことを気にしない男イヴァン、あたしの中ではそういうことになつてゐる。

でも、全く気にしないことなんてないと想ひ。それぞれ事情つてものがあるわけで。

「あー、あたしがいると抜けないつてこと?..」

「なんなんじゃねえ」

「そうよね。外に女がいるつて噂になつてゐるぐらいいだし、罪悪感でもある?」

「ねえよ

そんな理由で抜け出しあるわけじゃないつて本当は知つてゐる。

「何もおもしれえもんなんてねえだら」

「あんたのことは少しおもしろいと思つてゐる」

自分から声をかけてきたイヴァン、そここの田舎驚くほど真っ直ぐだつた。

他の奴らみたいに一発やつてみたいとか、そいつのじやなかつた

「……勝手にしろ」

「あんたつてやつぱり話がわかる男だわ

ついにイヴァンは諦めたらしい。

きっと全部自分が蒔いた種だつて気付いたんだと思ひ。あの時、自分から声をかけたりしなければ、面倒なことにはならなかつたつて。

でも、突き放すこともない。いくらでも、切り捨てられたはずなのに、そうしなかった。

Step after step goes far .

目が覚めて、まず枕元の武器に触れた。

“伝説の男”ウルフからの誕生日プレゼントと預かり物。ひんやりした感触が少し心地いい。

そうして思い出すのは別の男のこと。

何度、イヴァンのことを思い出すのだろう。

夢の中で会うことだって、これまでなかつたのに。忘れられると思つてたのに。

好きだったこともあつた。それは認めざるを得ない。だけど、それだけのこと、とつくに終わつた想いだ。

本当は何も終わつていないのかかもしれない。聞きたいことが、まだたくさんある。

聞かなければならぬと会いたい理由をすり替えているのかもしれない。

これは任務で、イヴァンは処刑対象なのと言い聞かせてる。何でそんなことをしなきやいけないのかはわからない。でも、イヴァンが何か理由を持つて動いてるだけはわかつた。命を狙われてるのも、どうやら本当はあたしの方みたい。

「気分はどう?」

「クソ眠い授業に出なくて良いのってサイコー」

いつもなら起きなきゃいけない時間に寝てたつて、いい気分。至福なんて言ってられる状況じゃないけど。

ネクロマンサーの授業はとにかく眠い。作文書かされるのも眠いし。

頭の中を整理する時間はあつた。十分とは言えないけれど。

「学園のこと、本当はもっと聞きたいんだけど……」

「全部終わったら尋問に付き合つよ。何時間でも」

なんて無責任な約束。

自分が向かう先を、何が終わりなのかもわかつていないのに。
あえて言つなら、約束が果たされることはきっとない。

良くて拘束、悪くて死亡。最良の結末なんて幸福なものじゃない
つてわかりきつてるのに。

「ほんと? 絶対だよ? 飲み物とお菓子、いっぱい用意するから
ね!」

輝く笑顔を見て、罪悪感を覚えるのに、それが少し幸せに思つ。
平凡で、たさやかなことをあたしは知らないから。

「ダイエット飲料はやめてよね。太りたくないならお茶とか「コーヒー」
にしなよ。ストレートとかブラックとか

「え~っ、砂糖とかシロップとかいっぱいいれなきゃ飲めないもん
!」

「じゃあ、諦めてデブになりな。あのカレシなら、どんなになつても大丈夫」

これから戦地に赴く気分だというのに、馬鹿な話をしている。

死亡フラグが立つてなきやいけど。

ヴィツッキーが支度をする間、あたしはまた武器に触れてみた。

マックが持つてきた物は武器でナイフとかいくつか装備してるけど、一番頼りになるのは史上最悪の誕生日プレゼントと、同じ相手からの一応ありがたい預かり物。聖なるお言葉が刻まれているからつて、撫でてみてもアンデッド殺しの精が出てくるわけでもないけど。

願いで叶うほど楽な仕事じゃない。

信じられるのは自分の力だけ。アンデッドなら今までだつて非公式に相手にしてきた。それ以外も。

今更、ネクロマンサーにも恐怖はない。

学園が恐ろしいところだというのもよくわかつているつもりだった。

本当に恐ろしいのはイヴァンなのかもしれない。
考えていることが全くわからない。未だにあの声が耳に張り付いている。思い出す度によからぬことを考えてしまつ。

「そろそろ行ける?」

「いつでもどうぞ、支度に準備のかかるお嬢ちゃん」
実地訓練と違つて、悪い先輩の氣まぐれにくつついでいくしかなかつたあたしはいつだつて臨戦態勢。これからアンデッドやらネクロマンサーやらを倒しに行くかもしれないって言ひのに、化粧する馬鹿はいないと思いたい。實際、いるんだけど。

ヴィックキーはまだナチュラルな方。アンナはいつも別の意味で戦闘態勢。化粧品も満足に買えないあたしとは大違い。

「そんなにかかつてないもん!」

「ああ、そう」

まだ何か言いたげだつたけど、続きをなかつた。ヴィックキーのケータイが鳴つたから。

「……了解です。すぐに向かいます」

つまり、それは“グレイヴ・キーパー”の指令つてこと?
会話を聞きながら、脳内を埋め尽くすとする嫌な予感をビックリ無視する。

そして、テーブルの上に地図を広げて、窓も開け放つて田を閉じる。

さすがにすっかり冷えた夜風が吹き込んでいたけど、必要なこと。

「……手配中のネクロマンサーが墓地の近くで田撃されたって、電話を終えたヴィックキーが迷つたような間を置いてから言った。

「だから、そっちに行くってこと?」

「そう。つて、何してるの? 恋なんか開けて寒いしー。」

「それってさ、こっちの方向の墓地?」

あたしは地図を指で叩く。

「ううん、ここだよ

ヴィックキーが指したのは全く別方向。

「じゃあ、そっちには行かない。行き先はここ

「えっ、でも指令が……」

「作戦を決めるのはあたし。それに、今となつては“墓守”なんてこれっぽっちも信用できな」「

手配中のネクロマンサー、そんなのはあつと、あたしをおびき寄せたための罠。

そつちから死者が目覚める声なんて聞こえない。

信じてもらえるなんて思わないけど。

「あたしと一緒に戦うつてのは、組織を捨てるかもしれないってことだよ。恋人も、何もかも」

そこまでは、やつぱり、わかつてなかつたみたい。

ヴィックキーが指を撫でる。そこにはシルバーのリング、あたしから見たら邪魔な指枷だけど、彼女にとつては大事なもの。

「じゃあ、お世話になつたね」

他の交通機関を使えばいいだけのこと。時間はかかっても、きっと彼らはあたしを待つてる。お金がないわけじゃないし、一人で乗れないほど世間知らずでもない。

「待つてよ! 一緒に行くよ。そう決めたんだから

服の裾を捕まれた。

やつぱり、あたしは守らないといけないみたい。

アンデッドが出てくるならハンターは必要だけど、正直、単純な戦力としてなら“ミスター・パーフェクト”的方が良いとも思うけど。

「あたしが脅迫してることにしておけばいいから

その一言で学園は絶対に信じる。

ヴィックキーは絶対に言わないみたいな顔してるけど、あたしが言う可能性だってある。約束しちゃったから。

墓地は嫌な空氣に包まれている。

元々、寄りつきたくない場所だけど、今は本当に死臭が濃い。ズツ、ズツ……と土が掘られる音、ズルズルと引きずるようになうように地を進む音。

薄暗闇の中に浮かぶ影たちは實に不気味。
何体ものアンデッドが徘徊してる。でも、まだ出てくる。ネクロマンサーの集団がこの一帯で蘇生術を使つてしまつたようだ。墓に眠る死者全てが目覚める。

術者の姿は見えないけど。

「う、うわあ……マジ?」

ヴィックキーが顔をひきつらせている。

やっぱり、一人で来た方がよかつたかも知れない。

「何でわかったの?」

「母親が遺した唯一の証かもね」

詳しく述べる暇はない。罵に飛び込んだ現状に余裕はない。いつ、奴らがこっちに気付くとも限らないし。

「ハンターなんでしょう? ビビるんじゃないわよ

ビビる理由なんてわかりきってるのに。

「あのさ、うちが扱う案件がどんなのか知ってる? 親族の蘇生頼んだら暴れ出したからどうにかしてくれって感じのばっかりなんだよ?」

「しかも、『案内人』がミスつたとか、余計なおまけ付きでしょ?」

それは、あたしたちが何で“ハンター”かつてことにも繋がる。アンデッドを墓に戻せれば一番いいけど、大抵の場合、不可能。

でも、できると信じているのが“案内人”って呼ばれる人たち。

死者を再び墓へ導くことで安らかに……とか云々。

でも、アンデッドの質はネクロマンサーの技量に比例する。もう一度家族に会いたいなんて依頼するけど、それは大きな間違い。制御できないアンデッドが暴れて惨事が起きるのに、そういう事件は増え続ける。ネクロマンサーもどんどん数を増やし、ビジネスが上手くなってるから。

今や蘇生を依頼するのは大きな間違いだし、その後始末を“案内人”にさせるのもとんでもない間違い、そういう場合は速やかにハンターに依頼するのが正解。聖なる武器で赦なくアンデッドを始末してくれる。後のことばは本物の聖職者とか処理班がどうにかしてくれる。

今は、手順を踏み、厳しいルールの下に行われていた時とは違う。きちんと蘇生し、墓へ返すことができるネクロマンサーももうない。

「いろいろのって、学園絡みで同行するかどうかなんだよ。それにしても、多くない？」

「だったら、もう帰りな。あたしは荒事専門だから慣れてる」

まだ帰すチャンスはある。あたしをここに運んでくれただけで十分。

学園は“グレイヴ・キーパー”ができるよりも前から、そういう集団だったわけだし。

「帰らないよ！」

その声にびくりと奴らが反応した。

サイアク。あたしは剣を抜いて、前に出た。

アンデッド 動く死体、死んだけど死んでない。死者でも生者でもない存在。

その扱いは未だに審議されているけれど、現状では速やかに滅することとなっている。そのままにしておくと色々まずい。

世の中にはアンジエロ・キエーザみたいな人間もいる。靈魂の叫びが聞こえる云々……彼の場合、なぜか“案内人”になるわけでもなく、ハンターになろうとしているけど。

彼の談によると本当に死者の靈魂が戻っているケースはほとんどないそうだ。大抵は何だか邪悪な靈がどうのこうの。あたしたちは暴れるから殺すだけ。

次第に現実を受け止め始めたのか、ヴィッツキーの援護がありがたくなつてくる。

でも、本当に怖いのはここから。

少し静かになつた墓地に咆哮が響く。一つ、二つ、響き渡る。

腕が、薄汚れた腕が地面を突き破る。

邪悪な気配、それはゆっくりと這い出でると側にいたアンデッドをひつつかむ。

「グールの相手をしたことは？」

あたしは目を逸らさずにヴィッツキーに問う。

アンデッドと一括りしてると、種類はある。大抵は、かの有名なゾンビ。運が悪いと骨だけのスケルトン。

そして、一番きついのが、これ。

今、バリバリと他のアンデッド ゾンビを食べ出したグール。人や死体を食べるどつても凶暴な奴。

「な、ないよ。あるわけない」

ヴィッツキーがブルブルと背後で震てる気がした。

普通はゾンビ止まり、グールの相手は学園の中でも特殊部隊的な

荒っぽい人たちがやることだから、無理もない

「だったら、ここにはいない方がいい。もう帰りな

「でも！」

それは一体何の意地なんだか……あたしよりも年上だから？　あたしが学園の訓練生だから？

「じゃあ、一つ約束して、本当にやばくなったら絶対車に戻つて、あたしを置いて全速力で逃げるって」

「そんなのできないよ！」

できる。それができない奴は大馬鹿。危機感ゼロ。命の危機に瀕すれば逃げ出すのが本能のはず。

「奴らはあたしを生かす理由はあるかもしない。殺す理由もあると思う。でも、あんたを生かす理由はない。殺す理由はいくらでも作れる」

いざれ、術者が出てくるはず。

そうしたら、イヴァンも出てくるかもしれない。

「あたしは大丈夫。でも、あんたまでは守れない」

「……わかった」

「……わかった」

答えを聞くと同時にあたしは前へ出る。

食事に夢中になつてゐる今なら、隙がある。でも、この一瞬を!!
されば厄介だ。

銃を抜いて、頭を撃ち抜く。それから剣で首を斬り落とす。

何て素晴らしい斬れ味。

ゾンビを斬つたつて血が吹き出したりはしない。ポンプが止まつてるから。

それでも、これで終わりじゃない。まだもう一体、出てきてる。ヴィックキーに近付く前にあたしが排除しなきゃいけない。そして、どこかに必ずネクロマンサーがいるはず。さっさと術者を倒すのが戦いの基本。そう簡単に倒させてくれないわけだけど。

でも、あたしは失念してた。一人っきりで戦いすぎてた。

ここは墓場でアンデッドの素はまだいるわけで……ヴィックキーの

すぐ足下が突き破られた。

「うわっ……！」

ヴィックキーが後退する。銃を構える。あたしも駆けつけようとするけど、じつも出てくれる。くそっ！

だけど、動かない。全てのアンデッドが静止している。

それから、拍手。

墓地には不似合いだけど、歌った奴よろめ。

あたしは音のする方へ銃口を向け、躊躇わざに引く。残念ながら

拍手は止まなかつた。

銃弾はアンデッドが受け止めた。盾に使うなんてなかなかやる。

「君は賢いな。未熟なところはあるが、将来が恐ろしい」
拍手をしながら出てきたのは、どこにでもいるようなジジイ。
でも、アンデッド共が周囲に集まる。紛れもなく術者。
ハンターだつてネクロマンサーだつて基本はただの人。
敢えて言うならネクロマンサーは大抵スーツとか綺麗なものを着
てる。あつちはビジネスだから小汚い格好はできないし、自分を紳
士だと思い込んでたりする。このジジイもその典型。

まあ、ハンターもハンターで自分を警察とか軍人とか法の番人と
か、そんな風に思つてる。学園の制服が仰々しいのもそういうところにある。

あたしはそれに値しないみたいで着させてもらえないけど。
だから、動きやすい格好をしている。小汚くたつて構わない。
「やはり、消えて頂くべきだ。あの小僧には悪いが……」
「小僧つてイヴァンのこと？」

どつちにしてもビンゴ。今のあたしたちはどつても危険な状況。
彼はいつでも死者の軍勢を率いて、あたしたちを殺せる。
「だつたら、あんたが先に消えたら？」

「あたしは退けない。イヴァンを引きずり出すまでは。
でも、手繩る糸の先に本当にイヴァンがいるかなんてわからない。
その前に糸が切れるかもってやばい状況。

こいつは全然イヴァンを仲間だつて思つてないし、それはイヴァンも同じことかもしれない。

「外見はキアラによく似ているが、中身は忌々しきウルフそのもの
だ」

「あたしはサンティーニの娘じゃない。ウルフの娘だから」

“伝説の男”ウルフに似ていると言われることを今は誇りに思つべき？

ネクロマンサーにネクロマンサーの母親に似ているって言われるのは困る。あたしはネクロマンサーじゃない。なる気もない。

でも、それは母を憎んでるってことでもない。

「エレイン・サンティニー、君の力が必要だが、君が狼ならば私は手懐けられそうにない」

「残念、あたしは狼以外の何でもない。犬にはならない。手を噛んでほしいならさつさとだしな」

生憎、牙は外付け。特大の奴だけど、年寄りの硬い肉を斬るにはこづじやないと。

「キアラは素晴らしいネクロマンサーだった。力の使い道を間違えたがね」

「昔話は必要ない。イヴァン・ブラッドリーはどう?」

母親のことなんて全く関係ない。それに、間違ってるのはあたしの親じやない。

あの人は完璧に死者を蘇生することができたって言つ。そして、必ず墓に還したって。

あまりに完璧すぎて再びの埋葬を拒む遺族を説き伏せることも何度もあつたつて噂で聞いた。

「残念だが、君は彼にはもう会えない」

できることなら会いたくないんだけど。

でも、会わなきやいけなくて、あいつが足を突っ込んだ世界がわからなくて、自分が巻き上げられた世界さえわかつてない。

ピエロは、きっと本当はあたしの方だって思う。

「たとえば、今、あんたに降伏するって言つたり?」

「何が望みだね?」

目が細められる。元々、細いんだけど。

あたしの真意を探つてる。

「イヴァン・ブラッドリー」

「ほう?」

「ここへ来ればあいつに会えると思った。あんたに用はないの」

今があたしの最優先事項はイヴァン。最早処刑命令に意味はないかもしれないけど、あいつに会わなきゃ何も終わってくれない。なのに、あいつがいないなんて。

「やはり賭けは私の勝ちだつた」

「脣が弧を描く。勝ち、ねえ……」

「ば、ぜ、君はここへ来た？」

「今、言つたばかりだと思つけど？」

ネクロマンサーも年を取ればやつぱりアルツハイマーにもなるの？なんて、その問いの意味するところはわかってる。

「なぜ、ここへ来られた？」

問い合わせたいなんて悪趣味。
問い合わせたいなんて悪趣味。

「皆、見事に圈に引っかかるてくれたよ。墓地の近くを少し歩かせるだけでいいのだから簡単なものだ」

“グレイヴ・キーパー”はあんまり優秀な集団じやないから仕方がない。ネクロマンサーを追うなんてことはあんまり得意じやないくせにやりたがる。全ては学園への対抗心かもしれないけど。

「だが、君はやはりキアラの娘なのだな。その才能を受け継いでいる」

才能なんて言われ方は嬉しくない。これは全く有り難くない贈り物。いつからか、ほんの微かにわかるようになつてしまつた。死者が目覚める気配。

「ウルフが何で“伝説の男”になれたか知つてる？」

「あの男はキアラを我々から奪つたばかりか、実に多くの同胞を殺してくれたからな」

「あの男はそれこそ狼並の嗅覚を持つてるんだよ。特にネクロマンサーに反応する」

つまり、才能だって言つならそつちの方がいいつてこと。

「君は実に嫌な目をしているよ、エレイン。キアラも同じ目を見せたことがある。君をネクロマンサーとして育てないと言つた時だ。

この世にネクロマンサーはもういらないと誓つたあの日……今でも私の胸を忌々しい思いで埋め尽くす

母親の話をされても困るのはあたしが昔話でしかその人を知らないから。小さい頃に死んで、それからは男手一つって言うか、学園に放り込まれたわけだし。“シングルファザー”ウルフのお涙頂戴な話も武勇伝もあたしにはできないわけで。

「蘇らせることができないのは残念だ」

母親の遺体は本人の遺言でウルフが火葬した。ネクロマンサーとして、自らが蘇されることを拒んだってわけ。

それが、きっと気に食わないのだ。この男たちは。

「それで 本当の望みは何だね？」

「さすが、お見通しつてわけ？」

どうせ、このジジイはあたしの考えなんて浅いものだと思つてゐんだろうけど。

「彼女、見逃してくれない？」

グールまで出てきた以上、どうにかヴィックキーを逃がす方法はこれしかない。

あたしは、どうにでもできる。でも、彼女はそうじゃない。

「エレイン！ 何、言つてるのー？」

背後でヴィックキーが喚いてるけど、聞こえないフリ。

今度こそ逃げてくれないと本当に困る。厄介な状況になつてるとにきっと気付いてないから。

「学園の人間じゃないし、取るに足らない“墓守”的一人”だから、殺す価値もないはず。脅威になるはずもない。

「イヴァンに会つまでは大人しくしてるよ。それこそ死体のようだ。あんたのことも知らないしね」

あたしは両手をあげる。

この男に処刑の命令が出るのは確実。あるいは、既に手配されるかもしれないけど、学園の命令があるわけじゃないし、正直構つ

てられない。

「いいだろう。私が十を数える間に消えたまえ」
男がヴィックキーを見る。あたしには妙な真似をするなど視線が突き刺さる。

一、二、三

ゆっくり良心的な速度で、数えられる。

四、五、六

ヴィックキーが動く気配がなくて、あたしは振り返る。

「早く走つて！」

七、八、九……

恐怖で足が竦んでる風でもない。ヴィックキーは動かない。

「十」

「ヴィックキー……」

「『めん！』でも、やつぱり逃げるなんてできないよ！ 取るに足らないつて言われたつて誇りはあるんだよ！」

ヴィックキーが叫ぶ。

ああ、何てとんでもない頑固者。

誇りは時に邪魔になる。あたしに学園の誇りはない。“伝説の男”ウルフの娘だつていう誇りも、あるわけじゃない。

「交渉は決裂のようだ。エレイン・ウルフ」

パンツと男の手が打ち鳴らされた瞬間、黒い影が茂みから飛び出してくる。

あたしに一気に近付いて、鳩尾を殴つてくるそいつの顔を見た。

全部、スロー・モーションだつた。

アンデッドにこんな真似はできない。人間の仕業。
学園の裏切り者はイヴァンだけじゃなかつた。

ねえ、先輩、あんたがイヴァンをそそのかしたの？

それとも、ヴィックキーの頭に手を伸ばすそっちのあんた？

問い合わせはシャボン玉のように浮かんで、弾けた。

助けようと手を伸ばせたのかさえわからない。

ただ闇に塗り潰される。

* * * * *

その目覚めが自然なものだったのか、五感を刺激されたものかはわからない。

目が覚めて最初に感じるのがひどい臭いだなんてサイテーすぎるあまりに濃厚な死臭だつた。アンデッドと密室で時間を共有するなんてことはそうそうないから。

目が覚めて最初に感じるのがひどい音だなんて、ほんとサイアク。爆音とかそういうんじゃない。それだつたら、あたしはイヴァンの部屋のデスマタルで慣れてる。

ぴちゃぴちゃと貪る音、お食事中つてこと？
全てがぼんやりしている。体は動かせない。

「おや、お目覚めかね」

淡々とした声が聞こえた。すぐ上から。
あのネクロマンサーだ。あたしを足置きにでもするつもり？ 悠々と座つてる。

「あまりに君がよく眠つているものでね」

それはどういう意味なんだろう？

よく働いてくれない頭で考えていると、無理矢理体を起こされる。女の子の髪を引っ張るなんてサイテー。ハゲたら全身の毛を永久脱毛してやりたい。

なんて馬鹿なことを考えてる暇もない。

ここは、きっとアジト。窓のない薄暗い部屋。

そして、ネクロマンサーには人間の仲間がいた。それも学園のハンターの戦い方を熟知してる奴が。偉大なる先輩がかつてトップ訓練生だった人さえ懐柔されている。どいつもこいつも腐つた。

「彼らが腹を空かしてしまったようだ」
他人事のように言う。それが何を意味するかわからない。
そう言えば、ヴィックキーはどこ?
探す、ここにはいない。

けれど、視線の先、離れたところにいたもう一人の先輩が笑った。
気がした。グールの近くで何かを拾い上げて、こちらに投げてくる。
目の前にカラカラと音を立てる小さな何か。赤く染まつたリング

交渉は決裂のようだ。エレイン・ウルフ

彼らが腹を空かしてしまったようだ

「う、いっきいいいい！」

その声にグールたちが反応する。そこには最早形がない。

赤黒い水溜まりと白い……

「うあ、あああああっ！」

暴れる。だけど、押さえ付けられる。

「離せ！離せ！くそ野郎っ！！この裏切り者！！」

頭の中で爆発が起きている。もう何が何だかわからなくて、がむしゃらに手足を動かす。

「君との約束を反故にしたのは彼女の邪魔なプライドだ」

「うるさい、うるさい、うるさい！」

「それに、彼女を殺したのは彼だ。死体をくれてやつて何が悪い？」
気付けば、あたしを押さえ付けていた先輩を突き飛ばしていた。

もう一人の先輩へと距離を詰める。

鼻を突く強烈な死臭、足下で跳ねる血、食事を終えたアンデッド、

それよりも目の前で笑う男が憎い。

「 よくもヴィッキーを！」

「 わざわざ、ここまで運んでいたしの前で、食わせるなんて……！」

「 許さない！ 絶対に許さない！！」

あたしに武器はない。でも、最大の武器はある。あたしの手足を拘束しなかつたことを悔いればいい。

突つ込んで、相手の反応が間に合わないまま、もつれ合いつ。

あたしは腕をとる。

「 つ、ぐあああああっ！」

大きな悲鳴を上げちゃつて情けない。『ロ』ロと転がつて。その腰にぶら下がつているナイフを奪い取る。

「 ウルフ、てめえ！」

「 ありがとう、あたしをそう呼んでくれて」

すぐに同じ目に遭わせてあげる。

進む足下に何かが当たる。

何か、じゃない。ヴィッキー。

「 あ、ああ……」

あたしはヴィッキーを搔き集める。奪つたナイフで自分の指を切る。痛みなんてどうでもいい。あたしの血がヴィッキーに溶けていく。

「 そうだ、いいぞ。エレイン・サンティニー。もうすぐお友達に会えるぞ」

うるさい、お前は黙つてろ。

何をすればいいかはわかつてゐる。

頭の中がぼーっとしてゐる。何が何だかわからない。ふわふわしている。

ズガン！

急浮上する意識、自分が何をしていたのかわからない。真つ赤に染まる手、硬い骨、鋭い痛み、引き離される。

けれど、またすぐに靄がかかる。

「おや、やはり君は邪魔者だな、小僧」「邪魔はどうちだらうな、勝手なことしゃがつて」この声はイヴアン？

「君はこれから我々の仲間ではなかつただろう？」フツとイヴアンが笑つた気配がした。それは肯定？ それとも否定？

「今日限りで仲間」つけはやめるか

「後悔するぞ」

突き刺すような声だった。はつきりとした警笛、ビコビコとした殺気がそこにあるのに、遠い。

「後悔なら最初からだ」

イヴァンらしくない言葉だ。

それらは、まるで付けっぱなしのテレビから聞こえてくるみたい。「ならば、次に会つ時、それが君の……君たちの最期だ」急に靄が晴れる。去つていぐ背が見える。手を伸ばす。届かない。

「待て！」

叫ぶ。この声は届かないみたいに背は消えていく。「許さない！ 逃げるの！？」

体が動かない。暴れても、ビクともしない。

「落ち着け、エレイン」

落ち着けるはずなんてない。

それなのに、体の力が抜けていく。

意識がどんどん黒く侵食されていく。

Hレイン

あたしを呼ぶ愛しい声が響いた気がした。

After night comes the day .

最初、イヴァン・ブラッドリーには関わるべきじゃないって思った。

あいつは、危険だつて感じた。危険すぎるつてどこかで警告音が鳴り響いてた。

誰よりも生きてるつて、そんな気がしたから。

だから、生きてないあたしは近付くべきじゃないってわかつてた。近付けば深みにハマつて、抜け出せなくなるから。

そして、イヴァンはそんなあたしを、きつと引き上げてはくれないから。

笑つて見下ろして、それで終わりだから。

それなのに、あたしは自分からイヴァンに近付いてしまった。遠ざければ必要以上に寄つてくる男じゃないつてわかつてたのに。退屈は嫌だつた。イヴァン・ブラッドリーという男を知つた後では最早、知らないフリはできなかつた。

惹かれるものがあるといふのは認めたくないことだつたけど。でも、危険信号を無視した。危険な方が素敵だなんて軽い気持ちじゃなかつた。

抜け出したかった。ただ生きるほどに死んでいく自分から。あたしもイヴァンのようになんか自由にクールに生きてみたかった。

敢えて言うならば、イヴァンはあたしの憧れだつた。尊敬の念さえ、どこかでは抱いてたのかもしれない。本人に面と向かつて言えるはずもないけれど。

「また来たの？」

屋上で一度同じ人物を見ることはない。

大抵、一度目であたしを見ると一度と現れない。

なのに、そいつは懲りなかつた。そんな必要がなかつたのかもしない。

イヴァンには何もなかつた。あたしがいて困る理由なんてない。いてもいなくても、大して変わりはない。

「またいるのか」

呆れたあたしに呆れ返したりして、随分余裕

「あたしに惚れた?」「

「馬鹿か、てめえは」

即答された。

あたしだつて本気なわけじゃない。自分でもふざけたことを言ったと思ってる。こいつはそういう奴じゃない。

「物好きをからかう」とぐらりしか、あたしにはやることないから。あんたと違つてね

退屈すぎる。何もかも退屈。

あたしは勤勉じゃないから授業は面倒。眠いし、だるいし、何で夜間と昼間両方受けなきやいけないのかがわからない。

配慮は全くなし。だから、あたしは勝手に適当にサボることにしてる。要領が良くなれば絶対にやつていけない。

「この男が来たからには、どうしても聞きたいことが一つあつた。

「この前あんたが言つたこと、あれってどういう意味?」

意味深な言葉をこの男は残した。あたしに、このあたしに、生きろと言つた。

「さあな

イヴァンははぐらかす。

そんなことどうだつていいだろ、という顔で。どこのまでも面倒臭そうだつた。自分が面倒臭い男だつてわかつてるの?

「自分で言つておいて教えてくれないんだ?」

「必要ねえだろ」

聞きたいから、多分、必要だから聞いてるのに、ひどい男だと思

う。

何で、この男が、あたしに、あんなことを言つたのか、本当にわからない。

* * * * *

目の前には壁……、じゃない天井。

天井なんて全部一緒に思うくらい取り立てて何もない天井。見回す部屋をあたしは知らない。けれど、この空気を知ってる気がした。

そして、視界に入つたその後ろ姿を何よりも知つてる。

「イヴォン……？」

体を起こして問いかける。そいつは振り返る。

「ああ、気を失つたから連れてきた」

ここは新しい住処つてわけ？

「どうやって？」

「車」

「いつの間に免許なんて取つたの？ どんな車、運転してるの？」

「いや、拝借した」

「拝借つて……」

つまり無免許、盜難車つてこと？

「墓地に乗り捨ててあつたからな」

「それって、ヴィックキーの……」

その顔がますこことを言つたとでもいうように歪んだ。

蘇る、悪夢のような光景。悪夢そのもの、でも、現実。血の色、まだ固まつていないぬかるみ……

現実が悪夢でしかないなら、夢から覚めるべきではなかつた。

「ヴィックキー……」

体が震える。指先から熱が失われていくような気がする。

「嘔吐さ……」

守るつて言つたのに、あたしは彼女を死なせた。

握り締めた掌に爪が食い込む、その手を開かされる。いつの間にか、イヴアンがすぐ側にいた。

「エレイン」

ねえ、何で、あんたは、そんな声であたしを呼ぶの？

ねえ、何で、そんなに優しいキスをするの？

また頭がふわふわする。

あの時とは違うキスに全てを持つていかれそうになる。大きく熱い手のひらが肩の丸みを撫でる。ジャケットは脱がされていた。

その手がタンクトップの裾から進入してこようとする。

「やめて！」

思いつきり突き飛ばす。何で、こんなことになつてゐのか、わからぬ。

だけど、イヴアンはまた距離を詰めてくる。

「あなたのことを話して！」

あたしたちは、この男を捜していた。この男が全て知つてゐるはずだから。

それなのに、背中にはベッヂの感触。

押し倒されている。覆い被さられていく。

「俺のことが知りてえなら、これからわかる」

あたしを見下ろして、髪を撫でる。なんて、セクシー。でも、そんな言葉には騙されない。

「何で裏切つたの？」

「それは、どの？」

色々、裏切つた自覚はあるつてわけ？

「全部に決まつてるでしょ？」

あたしを裏切ったことも、学園を裏切ったことも、あのネクロマンサーを裏切ったことも、何もかも洗いざらい。

「欲張りだな。だが、満たしてやるさ」

頬に触れて、ニヤリとイヴァンが笑つて、ゾクリとした。あの時みたいに、情欲を宿した目、ビリビリするとい声、でも、流されたくなかった。

「こいつは何も話してない。

「本当にやめてつたら！」

思いつきり蹴り上げて距離を取る。

こんな時にこいつは何を考えてるの？

「エレイン、てめえっ！」

「こんな時に興奮してんじやないわよ、色ボケ男！」

「空気を読め！」

「何でそれをあんたに言われなきゃいけないのよ！」「のレイプ魔

！」

「一体、何の空氣があるって言つの？」

あたしたちは敵になつたはずだった。それなのに、あたしを裏切つたはずのイヴァンはあたしを助けて、だけど、すぐに何もなかつたことになるわけじやない。そんなに都合良くない。

「傷が開いたらどうしてくれんだ！？」

イヴァンは顔を顰めて、腹を押さえてる。苦しそう……

あたしを庇つて矢が刺さつたこと？

「え、うそつ、やだつ……怪我人のくせに盛つてんじやないわよ」

そんなこと全然知らなかつた。

知つてたら……つて、絶対イヴァンが間違つてる。

傷の具合が気になつて、イヴァンの服を剥ぐ。だつて、あたしのせいだから。

「積極的だな。そういうことなら、わかつた。てめえが好きにしろ」

ニヤニヤと楽しそうに笑うイヴァン、腹にも胸にもそれらしいものはない。

完全にあたしがイヴアンを襲つてゐるみたいな不本意な状況。

「……騙したの？」

やられた。こいつはわけわかんない奴だった。クールなようで面倒な奴だった。

「いや、傷ならこっちにあるぜ？ 掠り傷だけどな」

イヴアンが上半身の服を全部脱ぐ。

傷は肩に近い部分、包帯が巻かれてる。突つついでみたけど、本当に掠つたみたい。

あたしはよくイヴアンの部屋に行つた。

お互にしなかつたから、イヴアンはあたしのいる前で着替えてたりしたけど、こんなにじつと見たことはなかつた。

よく鍛えられた上半身、ハンターらしい体をしてると思つ。

思わず、触りたくなるような……

「寒い」

「じゃあ、何で脱いだの？」

「何だ？ 下も見たいのか？」

「そうじゃない」

わざとらしい奴、やることなすこと意味不明。本当に意味不明。ストリップに興味はない。ズボンの間に押し込む札もない。

「エレイン」

絶対、この声はわざとだ。わかつててやつてるに違いない。やつぱり、外に女がいたのか。そう思うとムカムカするけど。

イヴアンはまた覆い被さつてくる。見上げれば、笑う。意地の悪い顔だ。

「忘れてえだろ？」

頷けば、絶対に忘れさせてくれると思つてしまつ。

「忘れたくない」

「忘れる」

「忘れちゃいけない」

忘れた方が幸せなこともあると思う。でも、これは許されない、

あたしの罪。

「だったら、思い出すな」

押し付けられた体温が、服越しに伝わってくる。
直に触れた腕から溶けてしまいそう。

「エレイン」

その瞬間、イヴァンしか見えなくなつた。

これ以上あらがえないと思つた。

あらがい難い力がイヴァンにはある。それは純粹なパワーじゃない。

好きだつたなんて、嘘。あたしは、今でもイヴァンが好き。
今でも、イヴァンを求めてる。

あたしの目を通してイヴァンも見たんだと思つ。

今度はあたしからキスしたのかかもしれない。

今はイヴァンが欲しくて仕方がなかつた。

* * * * *

ここはまるで刑務所だ。

毎日、そう思つてる。

昼間も夜間も授業。

昼間の奴らは完全隔離生活、夜間の奴らは傲慢でわがまま放題。
光が似合わない奴らには真っ昼間の生活を、闇の深さを知らない
奴らには夜間の生活を。

あたしはどうりでもあって、どうりでもない。

たとえ、夜間の授業をとつてたつて、あたしは昼間の嫌われ者。
昼間の奴らにさえ嫌われてる。

居場所がない。友達なんてできるはずもない。そんなのほしくもないけど。

屋上だけが、平和な空間だった。

初めの頃こそ、そこでやつてる奴らがいたけど、あたしが現れる
ようになるとそんな不届き者もいなくなつた。

唯一あたしが独占できる場所、何をするわけでもなく、そこにい
た。

空があつても解放感はない。世界の全てが閉塞されているから。

「生きる」

そいつは、いきなりやってきて、そんなことを言った。
自分しかいないとわかつっていたのに、あたしはそれが自分に向け
られてるってわからなかつた。

「てめえに言つてんだ、エレイン・ウルフ」

わかつてる。何であたしがそんなこと言われたのかわからないつ
てだけ。

「あたしが自殺するように見えるの？」

そんなのするわけない。

昼間の忌避も、夜間の侮蔑も、何とも思わない。

「さあな、てめえのことなんかわかんねえ」

自分で言つておいて、何なの？

「あんたの方がよっぽどわかんないわよ」

「イヴァン・ブラッドリー」

「知つてるよ、嫌われ者」

この男を知らない奴なんているんだろうか。

好戦的で、素行の悪さが目立つ男。課外授業さえ無視。あたしは
常連なのに。

協調性は皆無だけど、それを補えるほど、ないのが納得できるほ
ど能力が高い。

「てめえには言われたくねえ言葉だ」

ごもつとも、あたし以上の嫌われ者なんて存在しない。

「仲間意識なんていらぬよ」

傷を舐め合いつなんて気持ち悪い。

「んなもん何にもならねえよ」

まともなこと言ひ奴だつて思った。

虚言癖が悪化する一方の“嘔吐マドンナ”や不完全な偽善者“ミスター・パーフェクト”なんかよりもずっと。

こいつは闇の深さを知つてゐるつて思った。

だから、あたしはイヴアン・ブラッドリーに興味を持つた。持つべきじゃないとわかつていながら自分を止めなかつた。
もしかしたら、この時から……

生きる

そうイヴァンに言われた時、こんなことになるとは思わなかつた。でも、あの時から惹かれてたのかもしれない。そんなこと言つてくれる人なんていなかつたから。

「学園はてめえを殺そつとしてる」

あたしには「空氣を読め」とか言つておきながら、何でロマンテイックじやない台詞。

髪を撫でながら言つ葉じやない。

甘さなんてありはしない。あつてほしいわけじやないけど。

「俺は秘密を知つちまつたから」

ようやくイヴァンが自分のことを話してくれた。

余韻に浸りながら聞きたいことじやないけど。

「女に会いに行つて、見ちゃいけない現場を見ちやつたとか？」

「まあ……そういうことだ」

「うわっ、不潔」

ショック受けてるのは、認めてほしくなかつたから？

女絡みだつてことは否定してほしかつたから？

歯切れが悪かつたのは説明を面倒臭がつただけなのかもしれない。でも、イヴァンの場合、わからない。

「仕方ねえだろ、情報を掴むためだ。女は口が軽いからな」

「あんた、そういう理由で抜け出してたの？」

こいつは、在学時から学園に疑問を持つてたの？

あたしは、ただ毎日消化することしか考えてなかつたのに。そう思つと、何かとつても悔しいけど。

「……だが、それが奴らの運の尽きだ」

一ヤツとイヴァンが笑つた。妙にかつこいつと思つてしまつのは、

惚れた弱みとかつての？

考えるだけで寒くなる。やつぱり、こうこうのは性に合わない。

「敵は多すぎる」

捨てるほどこる。学園がビームでも腐つきつてのはわかつたから。

元々、親の関係で嫌々入れられたから、清く正しいソール学園なんて微塵も思つちゃいなかつたけど。

でも、それを、まさか一人で革命でも起しちゃつてわけ？

ありえない。

それでも、イヴァンはやる気だつた。

相手が馬鹿げたことをやらかそうとしてると同じよう。

「一人、絶対に信用できる奴がいる」

イヴァンがそんなこと言うなんて思わなかつた。

正直、こいつが誰かを信用するなんて、意外。

自分しか信じない男だと思つてた。信じられないんじゃない。信じようとしないわけでもない。完全孤高だと思つてた。

「誰？」

一体、誰がこいつの心を掴んだんだか。

嫉妬なんてあほらしいと思うけど、でも、ちょっとぐらい悔しいと思つていはず。

だつて、それはあたじやない。わざわざ言わないだけであたしも十分に含まれているのかもしれないけど。

「ウイリアム・ウルフ」

裸で抱き合ひながら聞きたい名前じゃなかつた。

何で、よりによつてあたしの親父なの？

これつて、ジョーク？

まあ、納得はできるけど……

「……でも、足りない」

いくら、ウルフが生きる伝説だからって、一人分にしかならない。

残念なことにウイリアム・ウルフは一人しかいない。

あの男に並び立てる存在は未だに存在しない。ウルフが何人もいたら、こんなにこの世はアンデッドで溢れていない。秩序があつたはず。

あるいは、キアラ・サンティニーが何人もいたら邪悪なアンデッドも存在しなかつたかも。それこそネクロマンサーは聖職者として扱われていたかもしれない。

考えたって仕方のないことだけだ。

イヴァンと同じようにウルフもまた孤高だった。

だから、もしかしたら、イヴァン・ブラッドリーが“第一の伝説の男”になるかもしれない。

「あいつに頼るのは癪だが……アームストロングも使える」本当に忌々しそうにイヴァンが言う。それが何だか笑える。

「あいつは学園の手先じゃないの？」

“ミスター・パーフェクト”なんて、あたしが最も聞きたくない名前。最悪な冗談としか思えない。

アンジェロ・キエーザだつたら良かったのに。

「俺にはわかる」

妙に真剣な顔でイヴァンが言つ。

何か変な感じ。イヴァンにとつて彼はどうでもいい存在だと思つてた。

「相手はわかつてほしくなさそうだけど？」

“ミスター・パーフェクト”は絶対に嫌がると思う。

「良くも悪くも、てめえのために何でもできる男じゃねえけどな」それはイヴァンの言う通りかもつて思う。

彼があたしのためにしたと思ってることは全部、裏目。あたしを笑い者にしてくれた。的を付けてアンナたちの前に差し出してくれた。

そうでなくとも頼りない。無人島で一人っきりになつても絶対に頼ろうとは思わない。

あいつと協力するくらいなら一人っきりで生き抜く。

だつて、成績優秀で、何回も実地訓練に出してもうついていでも、

彼には足りないものがある。

彼は全然パークターじゃない。欠けてるところがあるのは人間として当然のこと。

でも、彼はパークターって言われる自分から抜け出せないところがある。

「学園の方はウルフがどうにかする」

もしかして、イヴァンと父さんって繋がってるの？

だから、あんなこと言ったの？

実に、不思議。気が合うのか。

ううん、聞かない方が幸せかも。

「あんたは？」

愚問かもしれないけど、聞いた。今度はこの男の口からちゃんと聞きたいから。

「俺はあのネクロマンサーを追つ。あいつはとんでもねえことを考えてやがる」

それは、つまり学園の陰謀つてこと？

大体、想像はつくけど。

「どうせ、死者の軍勢率いてどうのうのうのうじょ？」

「世界征服、だそうだ」

「何それ、馬鹿みたい」

薄々わかつてたけど、笑っちゃうほど用並み。

子供じゃないんだから。

「それを本気で考えてやがんだ」

「あんたはその馬鹿仲間だつたつてことでしょ？ やぞかし、笑いを堪えるのが大変だつたろうね」

笑ってきた。馬鹿の仲間なんて死にたくなる。

「言つただろ？ 僕を引き込んだのが運の尽きだ。殺さなかつたこ

とが最大の失敗なんだよ」

「あんたが、正義の味方なんて悪夢みたい」

絶対、間違ってる。

「その役目はアームストロングの方がお似合いだな」「全然、お似合いじゃないよ」

“ハスター・パーフェクト”とか言われてることを考えれば、エドワード・アームストロングは適任かもしれないけど、あたしはあれほど最悪なヒーローならいない方がましだと思う。

「じゃあ、キエーザか？」

「アンジエロは名前の通り、天使かな？」

アンジエロは中身に目を瞑れば、全然名前負けしてないと思つ。きっと、天使のような子供だって言われて育つたと思う。何て美しい子でしょうね。多分、アンナもその類。しかも、それを勘違いしちゃつたタイプ。

アンジエロはアンナみたいにナルシストじゃない。

「なら、文句は言つな」

「だつて、あんた、喜んで悪役になりそりじゃない。実際、そうだと思つてたし」

人気のある悪のヒーローみたいな。

あたしも、そういうポジションがいいんだけど。

「てめえを守りてえからだ」「

射るような真剣な表情にドキッとする。

「あたしを……？」

「一番、危ねえのは、てめえだ」

それ、本当に髪を撫でながら言つことじやないと思つ。髪を撫でられながら、言われたいことじやない。

全然、ロマンティックじやない。

甘く囁いてほしいわけじやない。あたしたちにはやりなきやいけないことがあって、それは裸で抱き合つことじやない。

「そう思つなら、もう置いてかないで」

一人きりはもう嫌。

危ないからって、終わるまで逃げ隠れなんて性に合わない。

「俺が連れてくつて言つただろ?」

当然だつて、イヴァンが笑う。

でも、それは、あたしを悪の仲間に引きずり込むつてことじやなかつたの?

「あんたは平氣であたしを裏切る」

そう、いつも通りクールに嘘を吐く。キスだけ残して消えたよう

に、あたしを捨てられる。

「平氣なんかじやねえよ」

平氣なもんかよ、イヴァンが吐き捨てる。

「ずつとめえと一緒に戦いたかった」

わからない。いつも一人で戦つてたくせに、あたしと一緒に戦つて何になるの?

「それが叶わねえなら、いつそてめえに殺されたいとも思つてた

それ、本氣?

だから、あいつらの仲間になつたの?

この男が脅しに応じるなんて思えないけど、でも、学生にすぎないから?

「あなたの自殺の方法にはなりたくない」

「ああ、もう死ぬことなんて考えてねえ

その言葉を聞いてほつとする。

あたしにイヴァンは殺せない。だから、そつなるくらいなら、殺してほしい。

でも、こつなつた以上、もう離れたくはない。

「ねえ、連れて行つてほし」と「いるがあるんだけど」

ベッドの中でおねだりなんて、あたしらしくなくて吐き散つ。

でも、これはそんな甘い話じゃない。

「奴らのアジトなら知ってる」

放つておけば、イヴアンはあたしをそこに連れて行ってくれるだ
ろ。でも、そこじゃない。そこに行く前にあの場所に行かなきや
いけない。

「昨日のところ」

「あいつらはもう戻らねえ」

裏切り者のイヴァンとあたしに知られた場所に戻る馬鹿は本物だ
と思う。どうしようもない自信家とか。

「あたしはヴィックキーを守れなかつた。でも、代わりにやるべきこ
とがあるの お願い」

約束を守れなかつた。でも、そのままにしたくない。

「わかつた。でも、そう何度も“お願い”は聞けねえからな

「ありがとう、イヴァン」

「そう思うなら態度で示せよ」

「あたしの感謝が伝わらないなんて鈍いんじゃないの?」
イヴァンの要求がわからなかつたわけじゃなかつた。

でも、すぐに応えるなんて癪。

「俺はアームストロングみてえなお人好しじゃねえからな

「その名前聞きたくない」

「見せつけてやりてえくらいだな」

サイテー、笑つて吐き捨てて、それからイヴァンにキスした。

この後、起こることを考えると気が重くて、今は吐き気がするほ
ど甘い誘惑に溺れていたかつた。

Never say die .

新聞にはヴィックキーのことは書いてなかつた。でも、惨劇の現場には“墓守”と“案内人”と“学園”が揃つてゐる。

“学園”って言つても含みがあるんだけど。

「守るつて言つたくせに！」

マックは掴みかかつてきた。あたしは黙つてそれを許す。あたしに彼をはねのける権利はない。だつて、当然のこと。殴ればいい、でも、彼はそうしなかつた。

できなかつたと言つた方がいいのか。

弱々しく崩れ落ちて、あたしは何を言つたらいいかわからないま、床についた手にそつと指輪を握らせた。

イヴァンによれば、あたしはそれをずっと握り締めていて、なかなか離さなかつたらしい。

全く覚えてないんだけど。

あたしの中であの時のこととは既に不明瞭になつてゐる。忘れてはいけないと思つてゐるのに、もやがかかつてゐる。あたしは自分が何をしようとしたのかも覚えていない。無責任にもほどがある。

「無事で良かつた！」

“ミスター・パー・フェクト”あるいは“ミスター・学園”は今にも抱きつかんばかりだつた。

もちろん、それは拒否する。と言つか、それを許さない奴がいる。

「よお、完璧野郎」

ニヤニヤと笑つてゐるに違ひない。隣に立つた男に視線を向けなくとも、気配でわかる。

「イヴァン・ブラッドリー……」

苦虫を噛み潰したような、絞り出した声、あたしは更に追い打ちをかけてやることにした。

「あたしはイヴァンと行くから

「まあ、そういうことだ」

「こいつは間違いなく“ミスター・パーフェクト”的反応を見て楽しんでいる。」

わざと刺激しているのがわかる。決戦前、最後の楽しみなんてことはあるはずない。

前菜にもならない。

むしろ、誰もが楽しみにしてるメインディッシュが待ってるのに、その前に胃もたれさせるような最悪のメニュー。

そのまま、あたしたちは学園のもつと悪い人たちが来る前に退散することにした。

“ミスター・パーフェクト”的声が聞こえたような気もしたけど、イヴァンのバイクの爆音がかき消した。

どこへ行くかなんて聞かれたって教えるつもりはない。

これ以上、役者はいらない。死ぬかもしれないのは、あたしたちだけでいい。

でも、希望が全くないわけじゃないから。

風を切って、どこまでも一人で行けたらロマンティックだったかもしれないのに、行き先は冥界？

バカنسにはまだ気が早い。

あいつらがいる限り、お楽しみはない。

「ここ? なんて聞くまでもないわね」

墓地、それもネクロマンサーが待ち構える墓地なんて正解以外の何でもない。

「やあ、若い恋人たち。最期の“トートスピット”へようこそ」
まるでいつかの光景。

「救いようもないセンスの悪さ」
ジョーク？ それとも、マジ？
「だろ？」

イヴァンが笑う。これに堪えてきた自分を褒めるとでも？

「一人仲良くあの世に旅立つがいい」

ネクロマンサーがステッキを手にしている。それで地面を突く。
怖氣立つ嫌な気配、あつと言つ間にアンデッドだらけ。

「生きて帰るぞ」

イヴァンがあたしの肩を叩く。

そして、剣を構える。あのクールな日本刀じゃなくて、対アンデッド用。ただし、学園のじやなくて、“墓守”が使うようなの。つまり、あんまり良いものじゃない。ただの剣同然の代物。
あたしには“伝説の男”からのプレゼントと預かり物がある。

イヴァンは凄かった。

学園にいた時から追随を許さないって感じがあつたけれど、それは増している気がする。

二人で次々とアンデッドを倒して、背後から突然襲いかかってきたグールにもイヴァンは冷静に対処した。

そして、ネクロマンサーを追い詰める。

両方向から剣を向けられたその男は笑っていた。

ステッキを振り上げる、あたしが受け止める。イヴァンが足下に剣を突き立てる。アンデッドが苦しむ。

そう、あたしとイヴァンが一緒なら最強だつて思えた。

ついにイヴァンの剣がネクロマンサーの胸を貫いた。

「ふ……」

それは漏れた苦痛の声だと思った。呻きだとそう思つた。けど、

違つた。

「ふははははははっ！」

胸から剣を生やして男が笑つた。最期を彩るよつて渾身の力で派手に。

でも、これで、終わりじやない。これからが始まりだと言つよつに。

イヴァンは急所を外さなかつた。

間違いなく死ぬのに、それを全く恐れていな。あつけなく終わる氣はないらしい。

「何がおかしい？」

不快感を露わにするイヴァンの問いに彼が答えることはなかつた。バタリと男が倒れた。死んだのだ。それなのに、安心できない。あつさりし過ぎてゐる。墓地の規模に対してもアンデッドの数も少なかつた。

違う、まだ終わつてない。

「やばい！」

あたしはとつさにイヴァンの腕を引いた。

まがまがしい気配、ネクロマンサーの周りに渦巻いてる。息が詰まるほど、濃い瘴氣、恐ろしくなつてイヴァンの腕を必死に掴む。

イヴァンも何も感じていないわけじゃないと思う。

でも、これはあたしからわかるのかもしねない。

やばい、やばすぎる。助けてほしい。あの人が生きていたなら、どうにかできたのかもしねない。

いますぐウルフにきてほしい。

あたしはとにかく怖かった。

「ふははははははっ！」

もう一度、笑い声が響く。恐怖による幻聴じやない。

「礼を言おう。若い恋人たち」

今度はもつとはつきり聞こえた。死んだはずだ。胸を貫かれて、それなのに、何事もなかつたかのように立ち上がりつて笑つてる。「ううん、何事もなかつたわけじゃない。

「リッチ……」

唇が震える。ありえない。あつてほしくない。そつ思つのにわかつてる。

まだ死にたてて瑞々しい体をしてるけど、やがては涸れる。

「その通りだ。キアラの娘」

バツ、とネクロマンサー、否、リッチと化した男が両の手を広げる。風が起きた感じ、違う。まとわりついてくる。

「チッ……、どうなつてやがる?」

イヴァンが焦つてゐる。

凄く嫌な感じ、のしかかつてくんような……これはまさか噂の悪靈つてやつ?

急に強い光を感じた氣がした。でも、見えたわけじゃない。正確には何か暖かい波動のよつたものだった。けれど、あたしはそれを光だと思つた。

重かつた空気が急に軽くなつたのだ。

「だから、僕は常々、この業界における優秀なサイキックの必要性を唱えていたんですよ」

思わず振り返れば、そこに天使がいた。羽もわつかもないけど。彼が今とても神々しく見える。アンジエロ・キーラー、やはりその名前は彼にはよく似合つている。

「じゃあ、帰つたら論文書きなよ」

軽口も言えるくらいの恐怖が和らいだ。

「是非ともそつします。その時は協力お願ひしますよ

「それで貸し借りはなし?」

「もちろん」

微笑んで、アンジエロが一步前に出る。光が強くなつた。

「僕じゃアリックを消滅させられません。わかりますね？」

アンジェロは振り返らない。でも、あたしとイヴァン、もう一人に向けられてた。

「加勢するよ」

“ミスター・パーフェクト”エドワード・アームストロング、彼が隣に並ぶ。

「フン……」

一瞬目をやつてイヴァンが鼻を鳴らした。この男を待つてたくせに。

「今、君のお父さんが学園の方を抑えた」

「ああ、そう」

“伝説の男”ウルフがいてくれたら、なんて思っちゃいけない。あたしたちはあたしたちでやらなきゃいけない。

アンジェロの光に対抗するように闇が強まる。ゾンビ、グール、スケルトン アンデッドだらけ。多分、靈体も色々。でも、デッドしてないのが、混ざってる。学園の先輩、ヴィックイーの仇！

三人同時に踏み出した。アンジェロを守るようにする。ゴーストの類は彼に任せざるを得ない。

あたしたちはがむしゃらに戦った。そうするしかなかつた。疲れてきて、それでも剣を振るつて、気付けば、先輩一人とリックしか残つてなかつた。

先輩の一人はMPとやり合つてる。

もう一人はヴィックイーを殺した！

「許さない！」

「よせ、エレイン！」

あたしは復讐の虜、流れを乱したことなどつでもいい。イヴァンの声も遠い。

一撃は受け止められた。けれど、手を止めない。何度もあたしは

斬りかかる。さすが、かつては優秀な生徒だったのが納得できる。

でも、悪に魂を売った。

「ダメだ、エレイン！ 殺しちゃダメだ！」

“ミスター・パーフェクト”が何か言つてる。でも、そんなのどうでもいい。

ヴィックキーは殺された。だから、この男は生きてちゃいけない。ヴィックキーに比べれば生きている価値もない男、生かしておく必要がない。

どうせ、片方を生け捕りにすれば、他の仲間のことだつて吐かせられるはず。学園の方だつてウルフが抑えただから。

「くそつ、エレイン！」

あたしは気付かなかつた。スケルトンがまだ潜んでたなんて、不死の戦士らしく、短剣を持つてたなんて、全然気付かなかつた。それがあたしを狙つてたなんて。

「ぐうつ……」

イヴァンが呻いた。またあたしはこの男に守られた。

「イヴァン・ブラッドリー！！」

自分が戦つていた相手を氣絶させたエドワードが叫んだ。

「う、おおおおおつ！」

イヴァンはスケルトンを力任せに倒し、峰打ちでもう一人の先輩を氣絶させた。

でも、何かおかしい。

「イヴァン？」

「心配すんな、なまくらだ」

「そんなん……」

イヴァンの腕には短剣が突き刺さつてゐる。

「大丈夫だつて言つてんだ」

イヴァンはあたしから剣を奪い取つて、足下のスケルトンに突き立てた。アンデッドは普通の剣では簡単に倒せないから。あたしの銀の剣の方が確実。何せ、ありがたいお言葉付き。

「最後はてめえだ、エレイン。撃ち抜け！」

残るはリッチだけ。それをあたしに託すなんてどうかして。

「エレインさん！」

「エレイン！」

アンジェロもエドワードも、あたしは……復讐に取り付かれてイヴァンを、みんなを危険に曝したのに。

ううん、だからこそ、その責任をとらなくちゃ。

あたしは剣を引き抜くでもなく、お腹に手を当てた。預かり物の銀弾入りの銃。

「どいつもこいつも役立たずめ！」

リッチが喚き散らす。あたしは銃を構える。

「援護します！」

アンジェロが光を放った。彼も多分、そろそろ限界。

あたしは、引き金を引いた。銀の弾を撃ちぬくした。全部、命中だつた。やがて、リッチの体、穿たれた穴から煙が出てくる。そして、今度こそ終わりだった。

ネクロマンサーに荷担してた学園側の人間は一掃された。
これで綺麗をつぱり終わりってわけじゃないけど、ひとまず終わり。

まだ外にはたくさんのネクロマンサーがいるけど、学園を立て直すっていうのがある。

また伝説を増やした英雄ウルフは似合ひもしないのに、きつちりとした制服を着てる。

学園の先生が着る奴。いつもは外担当で非常勤だったから、好きな格好してたけど、これからはそういうわけにもいかない。

でも、明らかに着せてもらってる感じ、ちょー似合わない。

そんなことを考えてたのがバレたのか、睨まれた。そして、咳払い「エレイン・ウルフ、エドワード・アームストロング、アンジェロ・キエーザ、今日からお前たちは教官だ。心して指導にあたれ」

あたしとエドワードとアンジェロ、三人は仲良く並んでる。真新しい制服を着てるのはあたしたちも一緒に

あれからトップで卒業したあたしたちは生徒たちの指導係に任命された。

卒業したら、学園所属のハンターとして動くのは当たり前のことがなんだけど、大抵は雑用を経て段々上に行く。

それなのに、あたしたちも英雄扱いで即実戦に使えることを大して歳の変わらない生徒に教えなきゃいけない。

全部、学園側に膿が溜まつてたせい。穴埋め的な。

「何か言いたげだな？ エレイン」

「やっぱり、ウルフは紛らわしいと思つんだ。サンティイーの方でいいよ」

早速、廊下を歩いてたらウルフ教官、つて声をかけられたんだ。

本当に英雄効果。あたしはいつの間にか人気者。大人気。

でも、もう一人ウルフがいるわけで複雑。

「ミスとミスター、教官と主任で区別がつく」

この男は主任になつた。あるいは、総隊長的な、ハンターの編成を一任される偉い人。多分、その言葉以上の権限を持つてるけど。「比べられるし」

「今更だ」

そうなんだけど、こう複雑な気分。

「そんなにサンティニーを名乗りたいなら、昼間に送り込んでやる幸いというべきか、昼間 ネクロマンサー科の奴らには裏切り者はいなかつた。完全に学園に忠誠を誓つてゐるつていうか、恐怖刻まれてるつていうか……

あたしはそつちも卒業したことになつてゐるから、よくわかる。

「それ、いいですね！」

アンジェロが顔を輝かせた。

「僕、靈魂についての講義を両方でやることになつてゐんですけど、何か心細くて……だつて、アウェーですよ？」

今回のことでの一番脚光を浴びたのはこの男かも知れない。

初めて学園側からサイキックと正式に認定された上に、戦闘において有用だと判断され、サイキックの発掘・指導を一任され、昼間と夜間で教鞭を執らされるほど。何て言うか、スターそのもの。

「それも嫌」

アンジェロは嬉しそうだけど、あたしはそういう気分にはなれない。

* * * * *

屋上に行くと、そいつは既にそこにいた。

つまらなそつて空を見てる。俺だけ置き去り、みたいな。

そう思つと笑えてくる。

「笑つてんじやねえよ」

イヴァンが顔を顰めた。

この男も真新しい制服を着てる。この男の場合、生徒用の。前のはもうないからつて新しいのを作らされた。

「ウルフのせいだ。俺の功績に免じて卒業扱いにしてくれりゃいいのに」

忌々しそうにイヴァンは言う。そう、この男は卒業できなかつた。そもそも、卒業できるはずがなかつたんだけど。

「復学できただけで奇跡」

元々、学園を勝手に辞めたこの男、ネクロマンサー側に荷担してたけど、真の目的はそれを止めることで、ウルフに協力していたことが評価され、何と再び学園に戻ることになつた。

もちろん、条件があつて、一年分遅れを取り戻すこと。つまり、

留年扱い。

「何で、てめえが卒業できたんだ」

イヴァンは不服そうだけど、男の嫉妬つて面倒臭い。

「あたしは優秀だから」

元々嫌われ者だったけど、成績は悪くなかった。

「メイソンがいなくなつて、何もかも変わつたか」

「パパメイソンがいなくなつて、取り巻きも一掃された。マドンナ気取りのアンナも追放されて、その取り巻きだつた奴は必死にあたしの機嫌をとろうとしてさ、笑える」

父親が学園の敵として追放された以上、その恩恵を一身に受けてやりたい放題してたアンナが学園にいられるはずもない。

「俺だつて、英雄の一人だぜ？ それなのに、後輩どもは俺と田を合わせないようにしてる」

イヴァンは不満そう。自分が英雄だなんてどの口が言つんだか。

「あなたのその、『俺はヒーローなんだぜ顔』がいけないんじやないの？」

偉そうにしちゃつてさ、扱いは留学生なのに。

「ヒーローだからな」

「ダークなヒーローでしょ、あんたは」

あたしを巻き込んで一緒に消す罠だったとしても、一度は処刑命令が下つてゐる。

“墓守”が関わるとろくなことにならないからつて撃退したり、学園の追撃をかわしたりしてたんだし。

実際に手に掛けたりしてたのは、先輩一人の方らしいけど。

「それが格好いいんだろうが」

それ、本氣で言つてんの？

「呆れてなんにも言えない」

「てめえは俺を何だと思ってんだ」

「裏切り者」

いくら目的があつたって一度あたしを裏切つたのは事実。

あたしにだけは真実を伝えてくれたつてよかつたんじゃないの？

「そりやあねえだろ、エレイン。てめえの男に向かつて」

学園に戻つてきて、立場に差が出た以上あたしは強気に出る。一応、監督しなきやいけないつてことになつてゐるし。

「無事、卒業できたら認めてあげるよ」

今度は勝手に行かせたりはしない。

「つれねえなあ」

イヴァンが近付いてくる。うわあ、面倒くさい。

「エレイン、主任が呼んでる」

突然入ってきたのはエドワード、ナイスタイミング。

「チッ……邪魔しやがつて、完璧野郎は空氣読んでろ」

イヴァンにとつてはバッドなタイミングだったみたい。何せ、イヴァンはエドワードに逆らえない立場になつた。

「ブランドリー君？ 僕、君の論文の面倒を厳しく見るのはついに言われてるんだけどなあ……」

笑つてゐるけど、腹黒い部分が見えてる。あたしは甘やかすからダメって言われたけど、エドワードとアンジエロはこの男の指導をすることになつてゐる。

アンジエロはとっても忙しいから、手伝い程度らしいけど。

「くそっ！ どいつもこいつも！」

イヴァンは拗ねたみたいだった。でも、これが平和つてことなんだとと思う。

いざれ、また戦いの時がくる。でも、あたしたちはあいつと、戦える。

一メートル下に躍るその時まで。

Epilogue (後書き)

これにて『Six Feet Under』完結です。

当初の予定とは全く違つロンティングになつたりもしましたが、翻訳小説風（ティーンの女の子向け）を意識し、サイト用の小説とは違つテニンションで楽しく書けたかなと思います。

ここまで読んで下さった方に感謝です。ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6624o/>

Six Feet Under

2011年10月5日03時26分発行